

開発こうほう

Hokkaido Development Association

共に北海道の未来を創る

November.2025

11月号

北海道新時代

日高から考える持続可能な観光と地域づくり

町民のための複合施設ココワ（北竜町）

シリーズ「地域コミュニティ」

北海道における地域コミュニティの活性化に向けて

地方創生

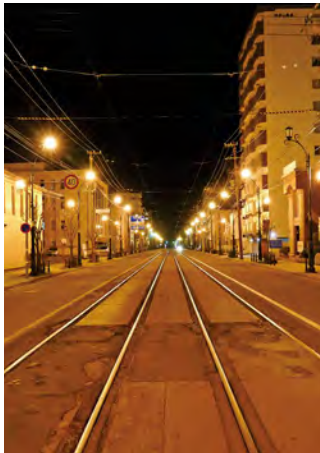
南幌町創生総合戦略

ガストロノミックツーリズムin北海道

「空知」

ほっかいどう学

流氷の妖精クリオネ



北海道遺産

Hokkaido Heritage

『変わらぬ道』（『北海道遺産フォトコンテスト2016』応募作品）

撮影者 押部 直樹 様

北海道遺産 「路面電車」

函館市電は明治期に馬鉄で出発し、1913（大正2）年に電車化、今も市民の足として定着している。路面電車が醸し出す風情を含めて観光都市・函館で果たしている役割は大きい。5年後の1918（大正7）年に始まった札幌市電は、路線の拡大や車両の改良を加え都市交通の中心だったが、地下鉄の開業などによって現在は1路線のみが運行している。ササラ電車は札幌の冬の風物詩。

Contents

北海道新時代①

シンポジウム

日高から考える持続可能な観光と地域づくり	1
国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部地域連携課	

北海道新時代②

町民のための複合施設ココワ（北竜町）	7
（一財）北海道開発協会開発調査総合研究所	

シリーズ「地域コミュニティ」〈4〉

北海道における地域コミュニティの活性化に向けて ー地域課題の解決に向けた新たな共創の取り組みー	12
中川 かず子	

地方創生

南幌町創生総合戦略	16
南幌町役場まちづくり課企画係	

ガストロノミックツーリズムin北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～ 第3話 「空知」	20
遊佐 順和	

「ほっかいどう学」第48回

流氷の妖精クリオネ	24
桑原 尚司	

インタビュー 飛翔のレシピ 36 ー室蘭市ー

地域の歴史とアイデンティティ 「いま、この場所で、仲間とできることをやる」 庭山 貴行さん	28
かとう けいこ	

地域おこし協力隊 第50回 ー美唄市ー

美唄市の“美しさ”を新たな視点で見つけ、 世界に届ける広報に	30
加藤 優菜	

「活動報告レポート」ー石狩市ー

“ひと”と“まち”を繋ぎ、未来を紡ぐまちづくり	32
NPO法人 ひとまちつなぎ石狩	

もっと知りたいアイヌの心45

藤村久和先生とアイヌ文化研究	34
佐賀 彩美	

わが村は美しくー北海道 未来へつなぐ 第57回 ー長沼町ー
北海道農業の代名詞を目指して

～長沼町の発信～	35
ながめま農業協同組合青年部	

お知らせ

旭川市立大学・旭川市立大学短期大学部との連携協定の締結	36
令和7年度 地域活性化活動発表会のご案内	37
公益信託北海道開発国際交流基金 2026年度募集要項	38
公益信託北海道開発国際交流基金2024年度採択事業 実施概要のご紹介	40
第39回寒地土木研究所 講演会	42
「コンクリート供試体確認版」のご案内	43
お知らせ	44



シンポジウム 日高から考える持続可能な観光と 地域づくり

本シンポジウムの資料については、室蘭開発建設部HP内に掲載しています。

https://www.hkd.mlit.go.jp/mr/tiiki_sinkou/jre2p60000001i86.html



国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部地域連携課

はじめに

国土交通省北海道開発局では、第9期北海道総合開発計画（令和6年3月閣議決定）の目標である「我が国の豊かな暮らしを支える北海道」の実現に向け、観光立国を先導する世界トップクラスの観光地域づくりを推進しています。

室蘭開発建設部では、これを受け、自然が織りなす景観と豊かな自然の恵みが魅力の日高地域において、地域で活躍する挑戦者とともに観光と地域づくりについて一緒に考えるシンポジウム「日高から考える持続可能な観光と地域づくり」を浦河町で開催しました。

会場には定員を超える107名、オンラインでは104名の方にご参加いただきました。

基調講演では、北海道大学大学院の石黒准教授から「資源を魅力に変える～これからの観光地域づくりに求められる3つの視点～」をテーマにご講演いただき、続くパネルディスカッションでは、日高管内で挑戦的な取組を行っているパネリストの皆さま同士で日高の魅力伝える情報発信やネットワークの重要性等について活発な意見交換が行われました。

本稿では、その開催概要をお伝えします。

【開催日】令和7年8月5日（火）

【開会挨拶】

北海道開発局 室蘭開発建設部 部長 佐藤 徹

【基調講演】

「資源を魅力に変える

～これからの観光地域づくりに求められる3つの視点～」

北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院

准教授 石黒 侑介 氏

【パネルディスカッション】

「挑戦者と共に考える持続可能な観光と地域づくり」

●コーディネーター

石黒 侑介 氏

●パネリスト

自然考房 Nature Designing

代表 鈴木 宏紀 氏

浦河町地域おこし協力隊

千本木 倫子 氏

株式会社 NEPKI

代表 山田 桜子 氏

ぼると・みつし

代表 橋本 勝司 氏

●コメンテーター

北海道運輸局観光部

次長 清野 信也 氏

【基調講演】

北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院

准教授 石黒 侑介 氏

「資源を魅力に変える～これからの観光地域づくりに求められる3つの視点～」

本日は、地域の資源を旅行者や住民にとっての魅力に変えていくためのポイントを、「3つの視点」で紹介したいと思います。

◆資源と魅力は何が違うか◆

観光振興に携わる方々がよく使う「観光資源」という言葉の意味は、実はかなり複雑で矛盾を含む言葉です。「資源」とは、本来、使うことを前提に使用している言葉ですが、観光客にとってはむしろ消費する対象です。また、「観光コンテンツ」という言葉も正確な表現でなく、学術的に正確な表現である「観光商品」という言葉を使用しても日本では違和感を覚える方もいるため、私は英語で「attract（人を魅了するもの）」という意味を持つ、世界で一般的に使用されている「観光アトラクション」という言葉が適切と考え、使っております。



観光アトラクションは、「核」（もの・こと）とその価値を伝える「マーカー」（言葉・情報）で構成されていますが、「核」そのものの価値よりも、「核」に乗せた情報「マーカー」が極めて重要になります。

エクアドルの「ミタ・デル・ムンド」という場所は、「赤道」を跨ぐことができる場所として有名な観光地となっています。しかし、測量技術の発達により「赤道」が全く異なる場所を通っていることが判明しました。それにも関わらず、今でも多くの人が訪れます。これこそが、観光アトラクションの本質で、「ここが赤道だ」という情報＝マーカーがあることで、人はそこに魅了されて訪れるのです。

日高エリアにおいても、「人を動かす」魅力を考える上では、「日高に行くこと自体が目的になるアトラクション」があるのか、それとも「近くまで来たから

寄ってみようと思えるアトラクション」なのか、あるいは「行ってみて初めて魅力に気づくアトラクション」なのか。観光アトラクションには階層があるということをしかり認識した上で、地域の資源を魅力として設計していくことが大切です。

◆マーカー（価値を伝える言葉・情報）を可視化する◆

「マーカー」をどう旅行者につなげていくかという視点で考えるとイメージの刷り込みが極めて重要ですが、その反面、実は構造的にかなり複雑です。

具体的には、イメージには種類があり、1つは「有機的イメージ」と呼ばれるものです。テレビや新聞、雑誌などに登場するイメージで、これは観光に直接関係がない方が良くとされ、いかに観光とは関係のないメディアに、日高のイメージを刷り込んでいくかが重要です。

「有機的イメージ」の準備が整うと、2つ目の「誘導的イメージ」へ移行します。これは、皆さまが広告宣伝やプロモーションで使われるイメージで、パンフレットやSNSなどを通じて発信されるものです。ただ、どれだけ努力して日高エリアの魅力を発信しても、先ほどの「有機的イメージ」がない人には全く響きません。まずは土台となる日高エリアの「有機的イメージ」をしかり作り込み、人を惹きつけるような「誘導的イメージ」を打ち出すことで、日高エリアがどのような魅力で構成されているのかについて旅行者にしかり伝わるようになります。

3つ目の「複合的イメージ」は、旅行者が実際に日高エリアを訪れた際に、自身の目で見たイメージと事前に抱いていた「有機的イメージ」や「誘導的イメージ」を組み合わせ作り上げられるものです。さらに、最近では、Instagramなどの媒体を通じて、訪問中や訪問後に「擬似的イメージ」を発信することも一般的になっています。つまりイメージ形成と一言で言っても、土台となる「有機的イメージ」を作り、「誘導的イメージ」を町や事業者の皆さまが打ち出し、来訪者が「複合的イメージ」を抱いて、最終的に「擬似的イメージ」としてSNSに投稿するという一連のプロセスを経なければならないのです。

◆消費者が「変わる」体験づくり◆

実際に日高エリアに来ていただいた際に、どのような体験をしてもらうかという点も重要です。

「モノ消費からコト消費へ」という言葉は、メディアでも取り上げられていますが、学術的にも裏付けがある考え方です。コーヒー1杯分の豆の価値は約24円しかありませんが、提供される環境によって380円になり、ブランド店では1杯1,090円にもなるそうです。この差は何かというと、消費者は、ブランド店に行くことで「自分が変わった気がする」と感じ、そのことに価値を見出し、その対価を支払っているのです。つまり、日高エリアに来る前後で「自分が変わった」と感じてもらえるような体験を提供することが、「資源を魅力に」、「魅力をイメージに」、イメージで訪れた観光客を「どう変えていくか」が重要だと考えます。

◆まとめ◆

今日、このような話をしたのは、魅力あふれる日高エリアを持続可能な地域づくりにつなげていく上で、「なぜ足を運ぶのか」あるいは「訪れないのはなぜか」ということを、構造的に理解する必要があるだろうと思ったからにはほかありません。それをしっかり設計していくことで、本当の意味で日高エリアに人が訪れることが、地域の豊かさにつながっていくのではないかと考えております。

北海道総合開発計画のその先を見据えると、地域、行政、そして民間の事業者の皆さんと一緒に「共創」することが、テーマになっていくと思いますので、私たち大学も仲間に加えていただき、さまざまな形で地域づくりを進めていければと考えております。



【パネルディスカッション】

「挑戦者と共に考える持続可能な観光と地域づくり」

<コーディネーター>

北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院

准教授 石黒 侑介 氏

<パネリスト>

自然考房 Nature Designing 代表 鈴木 宏紀 氏

浦河町地域おこし協力隊 千本木 倫子 氏

株式会社 NEPKI 代表 山田 桜子 氏

ぼると・みついし 代表 橋本 勝司 氏

<コメンテーター>

北海道運輸局観光部 次長 清野 信也 氏

◆パネリストの取組紹介◆

鈴木 愛知県出身で、日高町の通称「山日高^{*1}」と呼ばれる地域に移住してから今年で11年になります。



主な取組として4点あり、1つ目は「自然考房」という自然ガイド活動で、最近では日高山脈国立公園の登山道の整備などにも取り組んでいます。

2つ目に、日高の観光ガイドやプレイヤーがまだまだ少ないことから、2019年から日高を観光で盛り上げたい事業者同士で「日高観光ネットワーク」を立ち上げました。

3つ目に、道の駅内の観光物産店跡地に、地域の観光事業者で会社を立ち上げ「shop & community spaceさるくる」を開店し、日高地方全体のアンテナショップのような存在を目標に、日高7町の特産品を販売しています。

4つ目に、町内の宿泊施設の休館が相次ぎ、ガイドツアーに参加されたゲストの宿泊場所が無く、それなら「自分でやってしまおう」と今年1月に、「noie hidaka ノイエヒダカ」という一棟貸しの宿をオープンしました。インバウンド需要増から外国のお客様も安心して宿泊できるよう、英語表記を取り入れたり、英語のサイトに掲載したりと工夫しています。宿泊客

*1 山日高

日高町のうち市町村合併前の「旧日高町」の地域。

との会話を通じて日高の魅力を伝えていくことが今一番楽しいです。

基本的に1人で行っているため、たくさんのことはできませんが、仲間を作りながら地域の課題や取り組みたいことを集め、なんとか実現したいという思いで日々活動しています。

千本木 イギリスで生まれ、両親の仕事の関係で何度か日本とイギリスを往来しています。イギリスに滞在していた10代の頃に乗馬を始め、馬が大好きになりました。



馬に関わる仕事がしたいと思い、「イギリス乗馬倶楽部」を立ち上げたほか、イギリスのRDA^{*2}という障がい者乗馬団体でコーチとして携わっていました。

また、馬を所有していたこともあり、子馬が生まれるなどの経験を通じて、馬の体のケアが非常に重要だと感じ、2021年に「Masterson Method^{*3}」という馬のマッサージ技術の資格を取得し、「馬福^{うまふく}」という屋号で活動していました。

2024年に日本へ帰国し、もっと馬の近くで暮らしたいと思っていたところ、仕事で浦河を訪れた際、気候がイギリスに似て、馬もたくさんいることから、地域おこし協力隊に応募しました。新千歳空港から浦河に向かう車窓からの景色が、イギリスに戻ってきたかのような錯覚を覚えたことを今でも覚えています。

現在の活動としては、馬のマッサージをしながら、技術の普及を目的とした勉強会や体験会を開催するほか、イギリスで培ってきた知識を伝える講習会なども開催しています。



* 2 RDA (Riding for the Disabled Association)

障がいのある方にも健常者と同じように乗馬や馬車操作を楽しむ機会を提供し、QOL (Quality of Life : 生活の質) の向上を図ることを目的としてイギリスで結成された慈善団体。

浦河町は少し不便な場所ではありますが、馬好きの人たちはそうしたことを全く気にしないので、浦河町や日高地域の馬文化をどうやってアピールしていくかを日々考えながら活動しています。

山田 大阪で生まれ東京で育ち、北海道のさまざまな地域を旅する中で、二風谷^{にふたに}のおじいちゃん、おばあちゃんたちと仲良くなり2泊3日の予定が気づけば5年経過し、その中で出会った夫と結婚して、3歳の子どもと二風谷で暮らしています。



「株式会社NEPKI」は夫が立ち上げた会社ですが、「私だったらこういうことをやってみたい」という思いが膨らみ、2021年に代表取締役を任され、地元の方々にも助けていただきながら活動しています。

事業の柱は3つで、「アイヌ文化ガイド事業」については、ガイド事業だけでなく、国際交流時に通訳のような立場でお手伝いをしています。また、子どもたち向けにアイヌ文化体験教室を開催しています。

「アイヌ伝統料理事業」は、アイヌの食材とはどういうものを学ぶという意味で事業として位置付けています。

「伝統工芸事業」については、自らが作品を作るのではなく、販売のプロモーション等のサポートをしています。また、札幌市にある「札幌アイヌクラフトショップ」の運営にも関わっており、このショップで取り扱っている札幌のアイヌの方々が作ったクラフト作品の販売プロモーションにも携わっています。プロモーションに当たっては、「この人に会いたい」「作品を見てみたい」と思ってもらえるよう工夫しており、このプロモーションを通じて来訪していただくことで、地元の経済効果にもつながると思いますので、何か手伝えることはないかと日々模索しています。

私は人が好きで二風谷に住み始めました。人と一緒に何かをしたいという気持ちが強く、同時に人がいなければ何も始まらないという思いがあります。

* 3 Masterson Method

馬との信頼関係を築き、パフォーマンスに影響を与える体幹の筋肉や体の重要な接合部の緊張を和らげるユニークでインタラクティブな馬の整体法。

地元の人、観光客、私自身、すべての人が楽しく、面白いと感じられる地域でありたいと願いながら、地域がより良くなる形を模索していきます。

橋本 旧三石町（現在の新ひだか町三石）出身です。

4年前に地元の食材にこだわった軽食を提供するカフェスペース、地元の特産品を扱うお土産コーナー、日高山脈国立公園関連でmont-bellの商品も取り扱う「ぼると・みついし」をオープンしました。



開業のきっかけは、以前から子どもたちへの社会教育に力を入れていたこと、グリーンツーリズムによる地域おこしに取り組みたいと思っていたことで、北海道新聞販売所の事業継承をきっかけに観光にもチャレンジしようと始めました。

子どもたちのふるさと教育にも力を入れており、体験アクティビティを通じて三石を知るという機会を提供しているほか、子どもたちの学力向上のために新聞事業を絡めた「NIE^{*4}」という活動も行っています。子どもたちが自己肯定感を高めて、地域を好きになってもらうことと学力向上を目的に経営しています。

三石にはさまざまな体験ができる場所があり、今後もしゃもツアーを造成していきたいと考えています。地元の子ももたちにも貢献したいし、観光客を呼び込んで地域にお金を落としてももらえる仕組みを作っていきたいと思っています。

私には子どもが3人いますが、彼らが将来、地域に戻ってきても良いと思えるような場所を作らなければならないという思いで活動しています。



清野 皆さまの取組は、今回のテーマである「持続可能な観光」に深く関わるものだと関心を持って聞いておりました。

地域のことは、住んでいる方が一番よく理解しておりますので、移住されて来られた方々と

も連携し、地域一体となって、来訪者にとって価値のある体験を提供することの重要性を改めて感じました。

◆パネリストが考える日高地域の課題と目標◆

石黒 今日は地域が抱える「課題」や「今後何が重要か」といった点が大きなテーマだと思います。

いろいろな取組をされている中で、一番苦勞していること、課題だと感じていることについてお話ください。

鈴木 資源はたくさんあるのですが、活用できていないと感じています。もっと日高を知ってほしいし、多くの人に来ていただかないと地域の良さは伝わりません。「日高に行ったらこういうものがある」「こういう人がある」といったイメージを持っていただくことが課題でもあり、目標でもあると考えています。

ただ、せっかく来ていただいても、食事をする場所や遊ぶ場所が無いと、二度と来ないということになりかねません。資源があってもアクセスできなければもったいなく、施設整備も課題であると考えます。

山田 「やってみたい」という思いがあっても、実現するには時間がかかるということです。二風谷ではアイヌの工芸品が盛んな地域なので、工芸品を学びたい、作りたいという若い世代が増えてきています。若い視点から「こういう未来になったらいいな」という話は出てくるのですが、二風谷や平取町^{びらとり}のビジョンや優先順位との整合がとても難しいと感じています。

もう一つは仲間づくりです。私一人で「こういう未来になったらいいのに」と思っても、それは独りよがりになってしまいます。私だけが住んでいる地域ではないので、みんなで「何ができるか」を考え、形にしていく必要があります。

しかし、なんでも「体験プログラム」を開発、提供すればいいというわけではなく、人が集まり、つながりが生まれれば、面白いと思えるポイントは自然と増えていきます。その中で、付随的に体験プログラムが生まれてくるもので、意図的に作るものではないと考えます。「そうだ、京都に行こう」のように、「日高に行こう」と思ってもらえるようなイメージ作りが重要

* 4 NIE (Newspaper in Education)
学校などで新聞を教材として活用する活動。

で、そのための情報発信と、それを企画するネットワークの強化が大事だと考えています。

千本木 日高地域は、日本の競走馬の生産の約8割を担っている地域で、馬に関わっている人は非常に多いのですが、観光客と関わっている人は少ないのが現状です。観光客は、もっと馬に触れたり乗ったりできると期待して来るのですが、馬に関わる人たちは、高価な商品なので勝手に入ってきてほしくない、病気を持ち込んでほしくない、騒いでほしくないという思いがあり、実際にはそうした体験が難しいのです。

ただ、生産者が「うちの牧場ではこう育てている」といった情報を伝えることで、観光客がその馬のファンになり、生涯を通じて応援してくれるようになるかもしれません。さらに、馬ファンによる情報発信は非常に強力なので、そこに地域がうまく乗るといった観光の形があれば良いのではないかと考えます。

橋本 私が感じているのは、馬以外の目的で日高に遊びに来る人は少ないということです。

国立公園に指定されてからは、登山を目的に来る方も増えている印象はありますが、その他の観光や体験を目的に来る人はまだ少ないと感じています。

また、日高地域の情報発信に関して連携がうまく取れていないのが現状です。

◆パネリストの今後の展望◆

石黒 今後の事業をどう発展させていくか、あるいは新しいことにチャレンジする予定があるかについて、お話しください。

橋本 廃業した旅館を活用し、無人運営の旅館を始めようと考えています。そこで地域の産業や農業を体験できるような機会を提供するグリーンツーリズムにチャレンジしたいです。

山田 二風谷の小学校や保育園に、他の地域に暮らす子どもを受け入れ、アイヌ文化を学ぶことができる環境づくりをしたいと考えています。

千本木 馬の愛好家が長く滞在できるような馬の知識を学べる学校や研修コース等を作りたいです。

鈴木 街はすべて日高の景観や暮らしを体験できる宿の運営などをしたいと考えています。また、観光に関

わる人のネットワークづくりも進めていきたいです。

今後のチャレンジとしては、日高山脈^{えりも}襟裳十勝国立公園に指定されたので、十勝の観光関係者も巻き込んで、「ぐるっと日高山脈ネットワーク」ができればいいなと思い、声をかけている段階です。

◆おわりに◆

清野 皆さんが直面している課題は、それぞれの取組に特徴的に表れていたと思います。根本的には、仲間を増やししながら、自分たちが住む地域を次の世代に引き継げるようにすることが目的です。観光による持続可能な地域づくりや仲間づくりを行うには、行政も巻き込んで地域の方々でもう一度話し合うことが原点ですが、感覚的な話だけでは進まないため、データを可視化して分析することが重要です。

また、来訪者との関わりを通じて、地域の誇りや自慢できる点を再認識し、地域への愛着を深めることも観光の大きな意義だと思います。

石黒 観光は目的ではなく、地域を見つめ直し、つなぎ直すための手段であるため、来訪者の行動や目線も活用することが重要だと感じました。

都市から観光地へ行くという固定された観光像ではなく、教育や学び、ファンづくりなども観光の一部であることを改めて認識しました。

4名のパネリストのようにこれだけ活躍されている方がいますので、地域の中でネットワークができれば、人口減少や過疎化が進む中でも5倍、10倍の力で地域を盛り上げていけるのではないかと考えております。





町民のための複合施設ココワ（北竜町）

目黒 聖直（めぐろ まさなお）

（一財）北海道開発協会開発調査総合研究所所長

道内各地の町村において、人口減少の進行に伴い、生活に必要な各種機能が失われつつあるような状況にあります。中でも、スーパーの撤退は、買物難民を産むおそれもあり、極めて深刻な問題となります。そのため、そのような問題を抱えた道内各地の町村で、行政側が店舗建物を用意して、無償又は低廉な家賃で民間企業に店舗の営業をしてもらう公設民営の事例が増えています。

一方、北竜町のスーパーココワ（COCOWA）は、それらのスーパーとも若干異なり、第三セクターの振興公社が運営する町営とでも言うべき営業形態を採りました。類例も少ないため、とりわけ注目を集めています。筆者も、先日、現地を見学しましたので、その概要を紹介したいと思います。



ココワ（COCOWA：心と心が輪になる）の外観

開店の経緯

開店当初から注目を集めるココワについては、当協会でも、2025（令和7）年2月発行の冊子『人口減少時代のくらしを支える官民連携の取り組み』に、このスーパーを対象にした「食料品アクセス問題に対応した公営スーパーの成立要因」という研究（北海道大学大学院農学院の佐藤伊織、清水池義治両氏御執筆）を掲載しています（当協会ホームページで閲覧可能）。一部その内容とも重複しますが、まずは、ココワ設立の経緯を説明しましょう。

ココワのある北竜町は、深川市から車で25分ほどの

場所に位置し、作付面積が日本最大規模であるヒマワリで有名な人口1,600人ほどの町です。

この町の唯一のスーパーだったAコープが、施設の老朽化を理由に撤退するという話が浮上したのが、2013（平成25）年のこと。当時、毎年4～500万円弱の赤字経営だったそうで、新店舗の建設は難しいとして撤退の結論になったのです。この事態を受けて町内では協議が開始され、住民に対する調査を行ったところ、7割以上の人が町内から店舗がなくなることへの不安を示し、商品の内容次第という条件付も含めれば、85%もの人が新店ができれば利用すると回答しました。このときの調査票は、全世帯に配布されたので、ココワや役場のある和地区（町内最大の市街地）のみならず、碧水など他の地区を含めての結果です。つまりは、町内全体から強い支持があったのです。また、既存の小売店からも建設に反対の声はなかったそうです。こうした結果を受けて、ココワの建設計画は進み、2018（平成30）年4月に開店するに至りました。

このココワ、当初は、道北を基盤とするチェーンのスーパーにテナントとして入居してもらう構想を描いていました。しかし、辞退されたため、大半を町が出資した（株）北竜振興公社が施設の管理・運営に当たることになったのです。商品納入と店舗経営ノウハウの提供は、コープさっぽろの協力を得ることができました。



店内の様子

北竜町にとって幸運だったと言えそうなことがあります。ココワの仕入れ商品には、生鮮、飲料、日配食品、デリカ等があるのですが、これらは旭川や石狩などコープさっぽろの三つの配送拠点から別々に配送されます。しかし、三台のトラックが配送ルート上で合流可能なため、そこで荷物の積み替えをし、一台で全ての商品をココワに届けることができるようになったのです。この点は、前掲佐藤・清水池氏の研究に詳しく紹介されています。もし、北竜町がそういう立地になれば、開店はもっと難航したかもしれません。とはいえ、ココワへの協力は地域の支援であり、赤字にならない程度であればいいとするコープさっぽろの姿勢にも敬意を表したいと思います。

コミュニティの拠点として

今回、筆者たちが訪問すると、振興公社の社長と店長が待っていてくれました。

平日（金曜日）午後の時間帯、多くの買い物客が訪れていました。賑わっていた、と言っても、誇張でもなんでもありません。レジの後方で店長が筆者になにか説明しようとするのですが、店長は多くの買い物客と顔見知りであり、店長が筆者に話しかける途端に、買い物客から挨拶されて、「こんにちは」と返すものだから、筆者との会話は一向に進まないのです。しかし、店側と客との距離感の近さは、筆者には少し羨ましくも感じられました。

ココワの建物には、スーパーだけでなく、コミュニティスペースが併設されています。それは、会議室のような多目的スペースと屋内広場とでもいうべき（狭義の）コミュニティスペースからなります。そのコミュニティスペースは誰でも自由に使えます。多目的スペースの方は、サークル活動や会合のために利用できるほか、災害時の避難所としても想定されています。筆者が訪問したときには、町の商工会の総会が開催されるため、関係者の方が机の配置を調整しているところでした。



コミュニティスペース

このほか、建物内には、J AバンクのATMが設置されており、また、商工会の事務局や観光案内所等も入居しています。

施設の様子

実は、筆者は、2018年秋に初めてここを訪問しています。休日に個人的に訪れたものです。そのときの記録を一部修正して、ここに転記します。

買物をしてみた。大きさはコンビニを一回り大きくした程度だが、コンビニが申し訳程度に置いている野菜や肉・魚もひととおり揃っているのはやはりスーパーである。札幌の店舗に慣れている者には少し小さ過ぎると思うかもしれないが、生活の必要は十分に満たされるだろう。

建物は新しくて綺麗で、店舗と壁を隔てた隣の区画にはコミュニティスペースを設けていて、二人の高校生かと思われる女性が歓談していた。

ただ、今後、他の町で同様の施設を建設する場合には、より多くの機能を併設することに意を用いて欲しいと願う。たとえば、飲食店などかどうか。スーパーの買い物客が立ち寄って客数の増加が期待できるのだろうし、客にしても、買物ついでに食事や喫茶をしていくという使い方ができて便利さは向上するはずである。

実際、その場で見た事象は興味深かった。コミュニティスペースに屋台を入れて鯛焼きを売っていたのだが、その場には二人の高校生しかいないのだから、店主もいかにも暇そうであった。そのとき、駐車場に停まったマイクロバスから数人の人々が降りてきて、昼食の代わりにしようというのか次々と注文し始めたので、店主は大慌てとなったのである。このように、普通はスーパーがあれば人は来るし、その人たちがなにかを食べようということにも当然になりうるのである。

今回（2025年5月）の訪問でも、施設の印象で大きく変わったところはありません。

この文でも触れているテナントの入居については、実は建設時に募集したものの、移動する面倒を嫌ったのか、町内の店はどこも手を挙げなかったとのことです。

最近、町内の別の場所で元・地域おこし協力隊の方が洋食店を開業したとのことで、それがとても評判がいいそうです。今日では、この辺を通過する車両がスマホなどを使って、そうした飲食店を見つけることも簡単にできます。とはいえ、国道に面しているココワなら、町内の地理や事情に通じていなくても、走行中の車両の窓から建物の姿を認めて、立ち寄ることは十分に考えられます。現状でも、スーパーで惣菜を買ってコミュニティスペースで食べることもできますが、将来的にはなんらかの食事が提供されることを期待します。

現在の状況

スーパーには高齢者が毎日来店しており、一部には乗合タクシーを使っている方もおられるとのことです。また、コミュニティスペースを使うため、若者の来訪も増えているそうです。事実、今回は数人の小学生がいましたし、毎回訪れる度に誰かがいます。

スーパーの問題点としては、店舗があまり大きな

いために品数が限られ、日用使いの最低限のものを取り揃えることが優先されて、特別な品は置けないこと（筆者注：そうは言っても、観光客にも嬉しい地元の特産品は売っています）、また、バックヤードがなく在庫スペースがないことを挙げておられました。

しかし、地元の人たちのニーズに応えるという点では十分にその役割を果たしています。利用者の割合は、9割が北竜町民で、その他に隣接する妹背牛町や雨竜町の住民の利用があるとのことでした。特に、雨竜町に関しては、先ごろ、町内の生鮮食品を扱う店が閉店したために、毎週水曜日には町営バスが運行されて、それに乗った高齢の買い物客がやってくるそうです。また、町内の6軒の飲食店が食材の仕入れ等でココワを利用しており、町では、消費の町外流出を食い止め、町内消費による賑わいを取り戻す役割を果たしているとしています。

町としても必要なサポートを行っています。コミュニティスペースの管理等のために補助金を支給しているのは勿論のこととして、町内の飲食店等でも使えるポイントカードが発行されているのですが、そのポイント7倍セールのときにも補助をしています。

筆者の視点

筆者は、このココワの建設を三つの点で高く評価したいと思います。

第一に、スーパー部門を町の直営で開店したことです。

地方の活性化の手段としてよく挙げられるのが、企業の誘致だったり、大型店の誘致だったりです。しかし、全ての地方市町村に東京や札幌の資本が来てくれるわけではありません。しかも、誘致と言えは聞こえはいいですが、言い方を替えれば他力本願です。

確かに、北竜町でも、最初に考えていたのはチェーンスーパーの誘致でした。しかし、依頼していたスーパーに断られた段階で、「町民の皆さん、ごめんなさい。この町にスーパーは無理でした」となってもおかしく

はなかったのです。けれども、そこで諦めなかったことに、町民のための基幹インフラを守るという強い意志を感じます。

地域の問題は、結局、最後は自分たちの力でなんとかするしかないのです。以前、ある町の人と話していて、「昔はこの街中もっと賑やかだったけれど、もうダメだなあ」と言われたことがあります。北竜町の皆さんのような強い意志を持って欲しいと感じます。

第二に、スーパー開店のために新たな建物をつくったということです。

たまに東京に行くと、次々と新しいビルができていて、街の様子がより未来的になって、驚きます。個人的には、趣のある古い建物を壊してまで再開発を進める昨今の風潮には多少疑問を感じることもあります。が、全国的に若い人たちの東京への流入が止まらないのも、ああいとお洒落な街並みに憧れる部分があるのでしょう。しかし、その建物の大部分は、民間企業がつくりあげているものであり、一方で、地方では、そんな活発な民間企業の動きはなかなかありません。とすれば、そこでは公的部門が建物の新築改築を進めて、灰色と言われがちな現在の街並みを少しずつでも美しいものにしていくしかないと思います。道内各地の小規模町村に行くと、街中でも民家が多くあり、その家々は結構新しくて綺麗なことも多いのに、商店やオフィス等の準公共的な建物がくたびれているのです。だからこそ、街中にココワのような新しく綺麗な公共的な建物が出現したことには意義があると思います。

第三に、スーパーの隣にコミュニティスペースを設けたことです。

筆者が地方の町の街中に立ったとき、札幌にあるショッピングセンターのフードコートなどで学校帰りの生徒たちがおしゃべりをしたり、軽食を取っていたりする光景を思い出し、この街では若い人たちはどこに集まるのかと思うことがあります。かつて、筆者が、札沼線の現在は廃線となっている区間にある駅の駅舎内の様子を見ていたときに、地元の若いカップルが

やってきて、暫くおしゃべりをしてから出て行ったということがありました。室蘭本線の特急の通らない区間にある駅では、若い女性の二人組がやはりおしゃべりをしてから出て行きました。ローカル線の駅で、減多に列車も来ないから、こういうサロンのような使い方もできるのかとも思ったものです。でも、北海道ではそもそも鉄道駅のない市町村の方が圧倒的に多いのも事実です。そういう町では、若者たち（それ以外の人たちでも）がちょっと腰かけて談笑したいとき、どうするのでしょうか？

それに対する答えが、このココワのコミュニティスペースなのです。

もっとも、各地でこういう場所をつくる動きは増えています。北竜町のお隣にある沼田町のまちなかホットタウンなど公設民営スーパーの建物にいくつかの例があります。また、公共施設の中にこうしたスペースをつくる場合もあります。ただし、後者の場合は注意が必要です。かつて、筆者は、西日本のある市に立地する複合公共施設を見に行きました。市町村合併によって市域に含まれることになったものの、元々は単独の小さな町だったところであって、役場支所の窓口、診療所や文化ホールなどが一体となった施設なのですが、休日のその日はそれらが閉まっていて、コミュニティスペース的な空間を有しながらも、館内全体としては人が少なくガラとした印象を受けたのです。



店内の様子

事前の情報では、住民のための施設として大変に評価の高い建物だっただけに意外な感じでした。新十津川町や小清水町のように、役場に設けたコミュニティスペースに町民が集まっている例もありますが、小規模町村の場合、公共施設だけの建物にコミュニティスペースを併設することでは必ずしも人が集まるとは限らないのです。

その点、コミュニティスペースとスーパーは黄金の組合せです。どんな町でも一番沢山の人が集まるのはスーパー（や類似のお店）であって、それとコミュニティスペースが並置されることで、人が集まってくる効果が相乗的になるのです。賑わいをつくるための装置になります。皆で集まる目的があって、あるいは特に目的もなく集まってきてそこで寛げるようなコミュニティスペース（今夏にあった災害級の暑さの中では、クーリングシェルの機能も期待されましょう）は、スーパー同様、市街地にはどうしてもあって欲しい施設です。そして、ココワは、沼田町の例とともに、そのような形でできたもっとも早い時期のコミュニティスペースの一つであると言えます。

道内各地の町村には、建物の老朽化等により将来的な継続が多少危惧されているようなスーパーもあると思います。しかし、ある日、突然閉店すると宣言されてから慌てても間に合いません。コミュニティスペースを併設したココワのようなスーパーの計画を今のうちから考えておくことも大切なことと思われます。

《本稿執筆にご協力いただいた北竜町役場及び㈱北竜振興公社の皆様へ感謝申し上げます》

（注） 本稿掲載写真は、取材とは別の日（雨天の昼休み時間帯）に撮影しましたので、文章のイメージとは若干一致しません。

北海道における地域コミュニティの活性化に向けて — 地域課題の解決に向けた新たな共創の取り組み —

第4回

地域住民と自治体による外国人との共生に向けた取り組み — 伊達市、浦河町の事例から —

北斗文化学園日本語教育研究所 所長（北海学園大学名誉教授） 中川 かず子

1 はじめに（本稿の目的）

ここでいう「外国人」は、国内の様々な地域で暮らし、日本人と共に地域の構成員となっている人々を指す。在留外国人数はコロナ禍の2020-2021年を除き、年々増加傾向にあり、2024年末には3,768,977人（法務省統計）となり、10年前に比べて160万人以上増えている。北海道には67,484人（同）居住しており、その数は10年前に比べて3倍以上に増加している。こうした中、過疎化、高齢化の急速な進展で、道内においても、外国人居住者との共生に関わる課題を現実的に受け止め、共生を推進し、地域の活性化を探る動きが広まってきた。この動きは自治体、国際交流団体、事業者、住民が関わることになるが、地域によって主導的な役割の担い手が異なるのが興味深い。

本稿では、外国人との地域コミュニティの活性化につながる事例として、伊達市は住民、浦河町では町が主導する2地域の取り組みに注目した。

いずれの地域も最終的には住民と行政が連携していくことが望ましいのであるが、2地域の事例を通し多文化共生社会に向けての今後の展望と課題を考える。

伊達市と浦河町～調査の対象とした背景

全国的に生活者としての外国人が増加する中、令和3年、4年（2021-2022年）に文化庁では多文化共生社会に向けた人材養成事業を全国の日本語教育機関、自治体を対象に呼びかけた。筆者が所属する学園は室蘭に本部を置く専門学校で日本語教育課程を有することから、北海道胆振3地域（室蘭市・登別市／伊達市／苫小牧市・白老町）における「日本語学習支援者養成研修」講座を実施することが認められ、令和3～4年にかけて実施した。浦河町については、令和3～4年に「外国人との共生に関する意識調査」に関する住民アンケートを行った。結果は、外国人との共生に関す

る住民の意識は、積極的に受け入れるというものではなく、急増する外国人にどう対処すべきか当惑する住民が多かった。ただし、外国人を排除するという意識は高くなく、地域に住む外国人には日本語や社会のルールに適応してほしい、行政にもそのように願う住民が多くいた。浦河町役場によると、令和3年度に民間会社に委託し、急増するインド系住民に対し「外国人生活支援調査事業」を始め、その後、同事業に関わったインディー語通訳人材との連携から次第に町の役割も大きくなっていったという。

一方、伊達市では地域の外国人に対する支援や彼らとの共生に関わる活動がそれまでほとんど見られなかったが、2022年11月に上記の研修（2年目）の修了後、多文化共生社会を目指そうと、講座修了生を中心に活動がスタートした。市民の有志による活動が市の関係者に働きかけ、試行錯誤を続けながらも活動開始3年目を迎えている。市民の多くに「多文化共生を受け入れる」意識が浸透しているとは言えない状況の中で、行動的な一部の住民から活動が広まっていった。

2 伊達市の「SoDaTTo*」（そだっと）活動事例

2-1 SoDaTTo（以下、「そだっと」）発足の経緯

このグループは本学が文化庁から受託した「日本語学習支援者養成・研修カリキュラム開発事業」（以下、「学習支援者養成事業」）の講座修了生で構成されている。ここで、令和3年、4年に実施された上記研修の概要と目標を以下に紹介する。

（1）2022年度 学習支援研修カリキュラム概要 （全5回、毎週土曜日午後3時間）

第1回	地域日本語教育の課題／ 胆振地域の多文化共生への取り組み
第2回	学習支援の事例／学習リソース・人的リ ソース／「やさしい日本語」の取り組み

* SoDaTToは、^{そうべつ}壮瞥町、伊達市、洞爺湖町の頭文字。

第3回	外国人から見た日本語・地域のことば／ わかりやすい日本語とは
第4回	文化、言葉の違いをどう理解するか／ 文化共生に向けた協働的活動
第5回	参加者のふりかえり（課題設定～体験的 実践を通して）／全体討論／発表

（2）研修の目標

【基礎研修（第1段階）】

目標：住民の意識啓発、日本語学習支援者発掘

【研修修了後のオンライン講座（任意）】

目標：修了者と行政関係者との面談、活動の検討

➡連携、協働の可能な活動を検討

伊達市は人口30,763人（令和7年8月31日基準－伊達市役所）で、2005年に大滝村と合併し、農業、漁業、建設業の産業が盛んな地域である。近年は技能実習や特定技能の在留資格を有する外国人が農業、漁業、水産・食肉加工、介護等の分野に多く、現在、374人（令和7年8月31日基準－同資料）が居住しており、国籍別では、①ベトナム175人、②インドネシア63人、③ミャンマー51人ほか（同資料）となっている。

今回の3会場で行った研修の中で最も受講生が少なかったのが伊達市であった（2021年度8名、2022年度19名）が、修了後も仲間とつながり、外国人との交流活動を企画、実践するグループが生まれた。「そだっと」元代表の藤田功氏は令和3、4年の講座に参加、同じ修了生に声をかけて、市内の外国人と住民をつなぐ活動を開始した。

同氏からの聞き取り、記録資料等からこれまでの活動の概略について述べていく——2022年11月「だて結び」という名称で「地域の多文化共生を考える会」を発足、第1回交流会開催、2023年5月第2回交流会開催、8月にグループ名を「そだっと」（SoDaTTto）に変更、メンバーも多少入れ替えし、文化、言語学習を多く行うことになった。同年8月に「そば打ち体験」「座禅体験&宝物館見学、着物体験」、10月に「第1回日本語学習会」「果物狩り」「ミニ日本語講座」、11月に「第2回日本語学習会」、翌年2024年1月に「第3回日本語学習会」、2月には「第4回日本語学習会」

ほかを実施した。イベントには市内ベトナム人技能実習生（日本語中上級者、および初級者）、市民、外国人を受け入れている雇用主も参加していたという。2024年秋からは「日本語学習会」は行っていないが、2024年11月、2025年3月～7月までは、交流活動（生活相談、料理作り、お寺でのハープ演奏会、お茶会、お寺の地蔵祭り）を数回開催している。座禅体験、着物の着付け体験、日本語教室の会場は大雄寺が提供、そのほかのイベントにも多く市内の大雄寺の協力を得ているという。



（お寺での座禅体験の説明）



（初めてのそば打ち体験）

図1 活動の様子（写真は藤田氏提供）

2-2 住民有志の継続的な活動が行政を動かすか

このように、住民の有志によって外国人との交流活動が企画され、地域の外国人にとっても日本人とその地域社会を知るよい機会になっている。しかし、その一方で、こうしたボランティアグループが市民や行政の協力が十分に得られない場合は、活動の継続につながらない。藤田氏も、一般市民の理解、協力を得るのは難しく、ボランティア活動で行う限り、強要することはできないと話す。「そだっと」の市民向けの入会申込書には、「外国人との多文化共生を目的

とした任意団体『そだっと』では、地域に暮らす外国から来た方への日本語学習を助ける会のほか、市民との様々な交流会を通じ、地域社会からの孤立やトラブルの発生を最小限とする活動をしています」と、趣旨を謳^{うた}っている。会費は年額1,000円、協賛金も個人で1口1,000円、団体で1口10,000円と低く設定し、広く外国人、市民や企業に参加を呼び掛けている。

市民の外国人に対する意識について、伊達市内の漁業従事者が比較的多く、技能実習の外国人が散在している地域で、住民に対する意識調査を行った(2021年7月)。その結果、詳細はここでは述べないが、外国人の受入れに肯定的な反応が半数以上得られた。自ら率先して外国人との共生社会を創ろうという積極派は多くなかったものの、外国人を排除せず、自治体などに様々な支援策を講じてもらい、共生社会に向かう覚悟がうかがえた。参考になるのは、大澤茂美(2011)「共生社会—自立型共生の理想と困難」(『外国人のまなざしと政治意識』)であるが、この中に、大澤氏が以前に実施した外国人居住地域での大規模調査から抽出した住民の「共生の4類型」がある。この4類型は、外国人住民と「コミュニケーションをとる」こと、「対等性を認める」ことの両側面を軸にして、住民の共生観を4つに分類したものである—①自立型共生【日本人と同等の権利を持つことを支持し、積極的に外国人と交流し、共生社会を目指す】、②NIMBY型共生【外国人も日本人と同等の権利を持つことを支持するが、自身は外国人と積極的に交流しないNIMBY=Not in my Backyard】、③序列型共生【外国人との交流は支持するものの、日本人と同等の権利を持つことは支持しない】、④排除型【外国人と日本人が同等の権利を持つことは支持せず、外国人と積極的な交流を持つことも支持しない】。

伊達市の住民は、外国人を排除しないが、自ら率先して行動する【自立型共生】でなく、【NIMBY型共生】や【序列型共生】のようなやや消極的な共生観を持つ住民が多かった。これは多くの地域にみられる傾向である。そして、行政もこれまであまり積極的に多文化共生のための政策を打ち出しては来なかった。令和3年、4年の学習支援者研修開講の前後は担当の市職員も加わり、「そだっと」のメンバーとともに、今後の市の多文化共生施策について何度

か協議がなされたことがあったという。だが、行政が次第に関わらなくなり、新市長が着任し外国人対応の部局も職員が異動になるなどで、振り出しに戻ったような印象を受けた。そのような状況の中でも、市民グループは令和4年から現在までも可能な限り活動を続けていた。

そして、令和7(2025)年夏以降、新市長のもとで、伊達市のまちづくりと多文化共生を推進させる動きが見られるようになった。今後、住民有志もこれまでの経験と実績を基に、地域の外国人を雇用する企業、漁業組合、ホテル等の事業者と連携していくことが期待される。伊達市長をはじめ、市役所の関係部局を巻き込みながら、行政の積極的関与を促すことも課題の一つとなるが、8月には地域の国際交流を担う部局の担当職員が1名増え、新しい動きを期待する声が聞かれている。行政との連携が漸く緒に就いたところであり、伊達市は多文化共生社会づくりの基礎段階から第2段階に入ろうとしている。

3 浦河町の多文化共生社会への取り組み

3-1 浦河町のこれまでの取り組みとその特徴

浦河町における外国人支援の取り組みと課題は、正木浩司氏による「浦河町における在住インド人支援の取り組みと課題—2022年、2023年調査に基づき—」(『北海道自治研究』2024年3月号所収)に示されている。また、浦河町企画課による2022年から2025年に至る期間の取り組み報告書、および筆者の調査も含め以下に概要とその特徴について述べていきたい。

浦河町は上述の正木論文や浦河町役場企画課によると、インド人居住者が約65%を占めており(最近の調査では、外国人総数563人中、インド国籍368人—2025年8月企画課)、彼らの在留資格が「技能」ということから、「家族帯同が可能」「在留資格の取得や更新に日本語能力が問われない」のほか、「在留期間の延長が可能、延長の回数に上限がない」「監督機関が特にない」といった在留資格の取得、延長が比較的容易であるという特徴もある。このため、今後もさらに「技能」という在留資格で町内の牧場を拠点に就労するインド系外国人は増えて行く予想される。

外国人全体を国籍別で見ると、①インド(368人)、②フィリピン(66人)、③インドネシア、ジンバブエ(各

24人)、⑤ベトナム(22人)(2025年8月企画課資料より)となっており、インド人が圧倒的に多いとはいえ、他の国籍の外国人も居住している。浦河町によると、令和5(2023)年度には「多文化共生推進事業」を開始し、「役場庁舎内の看板表示の国際化(英語、ヒンディー語、ふりがなを表示)」「日本語教室の開催(8月3回、日本語教師による)」「インディアン料理を学ぶ」「ワークショップ(外国人母子支援について考える)複数回開催」「ふるさとワーキングホリデーの取り組み〜ヒンディー語通訳人材を受け入れる」などのイベントを企画している。さらに、令和6(2024)年度には、初めてインド人国際交流員(CIR)が着任、庁舎内で来訪するインド人への対応、インド人児童への教育支援、インド人母子への日本語教育支援、日本人住民とインド人との交流会での通訳サポートなど、様々な任務に当たっているという。令和7(2025)年に入ると、「外国人サポートセンター」が設立され、多くの相談に対応できる体制ができた。——こうしてみると、令和3年から令和7年の間に浦河町は試行錯誤を重ねながら、多文化共生社会の構築に向けて前向きに進んできたように見受けられる。サポートセンターを支える人的資源も多岐にわたり必要であると思われるが、企画課の担当者は諸機関と連携しながら多文化共生推進をこれからも目指していくという信念が強く感じられた。人口1万人余りの小さな町であるが、役場のスタッフの熱意と行動力が多文化共生社会の醸成に貢献していることを示すお手本と言えると思われる。

しかしながら、浦河町には就労目的の外国人だけでなく、外国人の乳幼児、児童、母親という特別のケアを必要とする人たちも多く住むことから、技能実習や特定技能等の資格で就労する外国人の多い市町村と異なる施策が求められる。長期滞在も視野に入れて地域社会に溶け込むためには、日本語を始め、教育・文化・医療・生活全般に関わる国や自治体の政策が極めて重要になるとと思われる。

3-2 浦河町の外国人居住者——生活者、長期滞在者と共生する社会に向けて

浦河町役場企画課で令和6(2024)年4月から7月にかけて町内事業所に対し、「人材確保・外国人雇用」に関するアンケートを実施した。報告書によると、

442事業所中199事業所から回答を得ており(回答率45%)、その内訳は、①軽種馬生産・育成(36)、②サービス(35)、③医療・福祉・介護(27)、④建設業(25)、⑤製造業(19)等となっている。この中で、「外国人をすでに雇用している」のが24事業所、31人もの外国人を雇用する事業所(軽種馬産業)が1か所、10人を超える外国人を雇用する事業所も5か所あるという。今後受け入れを予定または検討する31事業所を合わせると、55の事業所が外国人との共生を現実的なものとして受け止めていることがわかる。

道内の他地域と比べ、浦河町の外国人居住者の多くを占めるのが「軽種馬生産・育成」の従事者およびその家族で、「技能」ビザの特徴ゆえに、日本語能力も問われず、長期滞在が可能であり、地域で生活することになる外国人である。当然ながら、こうした外国人を受け入れる事業所や関係者は、雇用条件、生活上の規範、社会保障(医療・保険など)、税金・保険の支払い、災害への対応等を外国人に理解してもらわなければならない。日本語がわからなければ「通訳」を必要とするが、長期的な滞在者に対しては、「日本語の習得」が優先的に求められる。

ヨーロッパ移民都市にみられる「移民政策」では、「政策なし」「ゲストワーカー政策」「同化(社会総合政策)」「多元主義(多文化主義政策)」「異文化交流政策」の5つの類型が示された(渡戸一郎 2006/2019)が、日本の自治体に広く浸透する「多文化共生」は理念、方針として理解されるものの、具体的な国の政策に基づくわけではなく、自治体や地域住民の協力に支えられて成り立っている。浦河町のケースは、上の類型の「社会統合(同化)政策」が現実的課題となろう。今後、政策的視点を取り入れることの議論を含め、道と国とも連携して中長期的な課題と取り組むことが急務であると思われる。

本稿では2地域における事例を紹介し、実績と今後の展望を述べてきたが、地域の特性、資源、住民の意識等も政策に影響を与える要因であるため、地域によって異なる課題があると思われる。外国人との共生が地域の活性化につながるよう、行政と住民の意思疎通が十分になされ、連携が強まることを期待したい。

1 はじめに

南幌町^{なんぼろ}は、北海道の中央部よりやや西南端の石狩平野に位置し、夕張川、千歳川に囲まれ、東北は岩見沢市、東南は旧夕張川を隔てて長沼町、西南は千歳川を挟んで北広島市、江別市に接しています。東端は東経141度42分、西端は東経141度34分、北端は北緯43度07分、南端は北緯42度59分に位置し、東西に11.765km、南北に13.85km、面積は81.36km²を有しています。

東北部より、やや緩傾斜しており、高丘地は全くない全町平坦地区で標高は10mです。

旧夕張川及び幌向^{ほろむい}運河沿に発達した沖積土と幌向原野を形成する泥炭地からなり、泥炭地帯においては各種土地改良事業が進められました。

近年は、住宅地においては、子育て施策の充実などにより美園地区を中心としてみどり野団地の販売が大きく進んでいるほか、令和8年10月の分譲開始に向けて「南幌流通団地」の整備を進めており、これらの動きとともに商業用地の利用も伸びています。

農地は、大規模で専門的な農業者や農地所有適格法人を主体とした生産性の高い農業が展開されており、米や小麦、大豆、野菜類などの食料の安定供給のほか環境保全の面で重要な役割を担っています。

2 人口の推移

本町の総人口は、札幌市のベッドタウンとして宅地の分譲が進んだことで平成2年から人口が増加し、平成10年には1万人を超えピークを迎えました。

その後は宅地の販売が停滞し、令和4年まで人口減少が続いていましたが、子育て世代の移住を促すための環境整備や札幌市近郊のまちとして知名度向上を図る施策の効果が表れ、令和4年5月からは前月対比で



南幌町位置図



南幌町空撮

人口増加に転じ、同年7月からは前年対比でも人口増加に転じるなど、現在まで人口の増加傾向が継続しており、令和8年9月1日時点(住民基本台帳)では8,125人となっています。

総務省が令和7年8月6日に公表した、住民基本台帳に基づく1月1日時点の人口動態調査において、日本人人口の増加率が全国で唯一、3年連続で上位5位以内となりました。

このような現状を踏まえ、今後も子育て支援の充実や若者世代の移住・定住促進、地域産業の活性化などに寄与する様々な施策を展開していき、人口の将来展望を令和32年で7,500人以上とする「(第3期)南幌町創生総合戦略」を令和7年3月に策定しました。

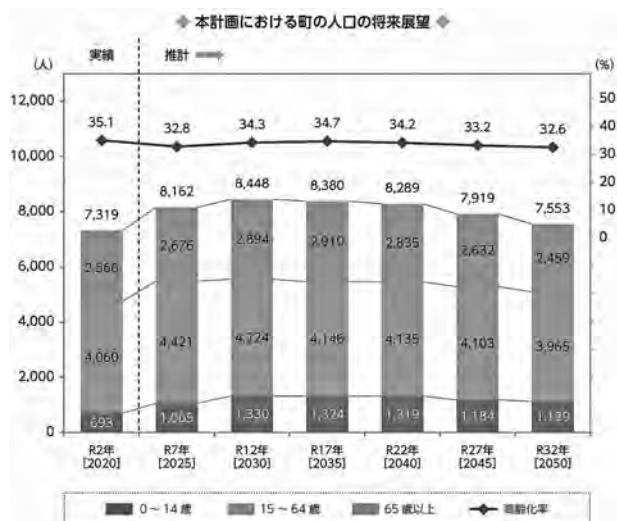


図1 人口の将来展望(南幌町創生総合戦略より)

3 南幌町創生総合戦略の概要

本町はこれまで「第2期南幌町まち・ひと・しごと創生総合戦略」に基づき、地方創生拠点整備交付金やデジタル田園都市国家構想交付金を活用し、子ども室内遊戯施設の整備や当該整備と連動したエリアマネジメントの推進、温泉施設の整備、学生の地域定着推進などを行ってきました。また、地域特性を活かした持続可能なまちづくりを推進したことにより、人口増加や子育て支援策の効果が表れ、特に子育て世代の転入

超過が顕著となったものの、雇用創出や産業活性化、デジタル活用などの課題も浮き彫りになりました。

こうした課題に向き合いながら、地方創生の取組をさらに進めるため、第3期となる「南幌町創生総合戦略」では、これまでの基本目標に加え、デジタル技術を活用した取組をさらに推進するため、内容を見直しました。

4 基本目標と具体的な施策

【基本目標1】 若い世代の結婚・出産・子育てを支援する。

令和2年以降、本町では社会増となり、特に子育て世代の転入が多い状況です。この層をターゲットにした人口増加施策を展開します。

一方、合計特殊出生率は1.22と全国平均より低く、出生数は35人前後で推移しているため、子育て支援の充実と住環境整備による少子化の抑止と出生数の向上を目指します。

<基本施策>

- (1) 子どもを安心して産み育てられる支援体制の整備
- (2) 子育て世代が定住したくなる住環境の整備
- (3) 子どもの遊び場の充実
- (4) 男女の出会いの場づくり

【基本目標2】 南幌への新しい人の流れをつくる。

町外からの交流を増加させるため、町の魅力を広く発信するとともに、農業振興や観光振興にもつなげていきます。

また、町のホームページなどにより、町の魅力やふるさと納税返礼品などを広く発信し、農産物をはじめとする地域産業の活性化につなげます。

- (1) 観光の振興・PR
- (2) 効果的な情報発信
- (3) ふるさと納税制度の普及促進
- (4) 地産地消と消費者との交流
- (5) 広域連携の推進
- (6) 企業版ふるさと納税の活用

【基本目標 3】 安心して働ける雇用環境をつくる。

本町の就業人口は第3次産業が約60%を占め、第1次産業と第2次産業はそれぞれ20%未満です。しかし、土地の66.8%が農用地であるため、農業を活かしたまちづくりを推進します。

さらに、事業所数が増加していることから、商工会との連携や企業誘致を進め、町民の就労機会を確保し、まちの潤いを与えられるまちづくりを進めます。

- (1) 企業誘致等の推進
- (2) 雇用の創出と支援
- (3) 商店街の魅力づくりの支援
- (4) 産業の担い手の確保・人材育成の支援
- (5) 農業経営基盤の強化

【基本目標 4】 時代に合った魅力的な地域をつくる。

バスなどの移動手段の確保や道路網の整備を進め、誰もが快適に生活できる環境を整備します。また、町民と行政の協働によるまちづくりや、デジタル技術の活用による行政サービスの向上と業務効率化を図ります。

- (1) 交通ネットワークの充実
- (2) 居住環境の充実
- (3) 誰もが安全・安心に暮らせるまちづくり
- (4) 協働によるまちづくり
- (5) 自治体DXの推進

5 取組事例

【事例 1】 子育て支援策の充実と効果的なPR活動による移住・定住人口の拡大促進】

本町は平成10年の1万人超えをピークに人口減少が続いていただけでなく、高齢化^{いびつ}に関しては、他自治体に類を見ない本町の歪な人口構造が背景となり、平成27年から令和22年までの高齢化変化率を予測した北海道高齢化スピード予測（北海道開発協会こうほうマルシェノルドより）において、全道1位となる数値が示されました。

将来的に持続可能な自治体運営とまちづくりを進め

るためには、人口減少だけでなく人口構造の是正に関する取組の必要性に迫られていたため、子育て世代への支援策の充実として、子育て世代への住宅建築費助成や子育て支援米の支給（中学生までの子ども一人当たり10kg）、学校給食費の半額助成、高校生までの医療費全額助成などを実施しています。

また、あわせて札幌圏域の子育て世代をターゲットとしたPR活動として、ラジオや雑誌などによる広告宣伝活動や子育てイベント移住相談会などへの出展、移住体験住宅の建築などを実施し、子育て世代の転入者増加につながりました。

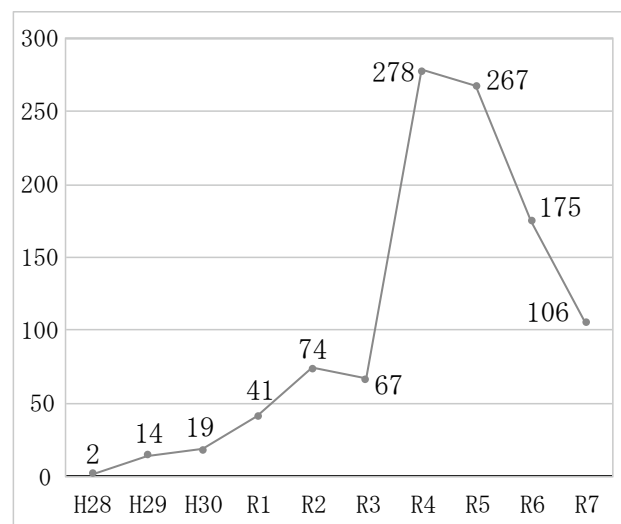


図2 子育て世代住宅建築費助成事業を活用した転入者数
※ R7は9月1日時点の人数



住宅団地空撮

【事例2 新たな人の流れを生み出す遊びと体験の子ども室内遊戯施設整備事業】

これまで実施してきた子育て支援施策などにより、子育て世代を中心とした転入者が増加し、人口減少の推移は鈍化している傾向にあります。

子育て世代にとってより魅力的なまちを目指し、「暮らしやすいまち」「子育てしやすいまち」「暮らしていて楽しいまち」の環境を整備するために、子育て世代にとって非常に需要が高い、季節や天候に左右されずにいつでも遊ぶことができる子ども室内遊戯施設「はれっぱ」を令和5年5月にオープンしました。

計画ではオープン1年目（令和5年度）に遊戯エリア利用者数93,000人を見込んでいましたが、133,210人（施設全体では192,087人）と計画を大きく上回る利用者となりました。令和6年度についても遊戯エリアで122,912人、施設全体で183,335人の利用者がおり、子育てしやすいまちづくりに寄与しています。



子ども室内遊戯施設「はれっぱ」



「はれっぱ」内遊戯スペース

【事例3 南幌温泉周辺整備事業】

本町における最大の資源である豊かな自然と観光拠点の核となる南幌温泉を活用して、魅力ある観光拠点エリアづくりを進めるため、温泉を利用できるという優位性を活かし周辺施設との親和性の高い高規格キャンプ場及びRVパークを南幌温泉の隣接敷地に整備します。それにより親水公園での釣りやパークゴルフ・乗馬と合わせて、本町ならではの自然を体験できる一体的な観光拠点エリアとしてより多くの観光客を誘引し、町内の交流人口を増加させ、地域経済の活性化につなげます。

現在、令和8年度からのオープンに向け工事を行っています。



高規格キャンプ場 イメージ図

6 おわりに

本町ではこれまでの各種施策の成果により人口増加が続いているものの、地方自治体を取り巻く環境の変化の中で、先送りできない課題に直面しています。それらの課題を一つずつ乗り越えるため、町民や町内事業者、町議会議員、町職員との対話を重ねながら、総合計画が示すまちの基本理念である「誰もが笑顔で活躍できるまちづくり」の実現に向けて取り組んでいきます。

ガストロノミックツーリズム in 北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～

第3話 「空知」

遊佐 順和 (ゆさ よりかず)

公立大学法人旭川市立大学 新学部設置準備室 教授

東京都出身。北海道大学大学院教育学専攻修了。大学卒業後、日本フィルコン株式会社、池協会計事務所、AIR DO北海道国際航空株式会社、株式会社ホテルオークラ札幌などの勤務を経て、2010年より札幌国際大学に奉職し、2025年より現職に就く。本務の傍ら、内閣府地域活性化伝道師、北海道住宅供給公社理事、一般財団法人北海道開発協会評議員、一般社団法人和食文化国民会議 全国「和食」連絡会議「和食」地域特派員なども兼務する。



今回は旧産炭地が点在する空知の食を見つめます。かつて、北海道中央部に位置する夕張・赤平・芦別・歌志内・美唄・三笠などの空知地方には、国内有数の優良炭田「石狩炭田」があり、1960年には全道人口の約15.1%が生活していました。室蘭―苫小牧経済圏では、空知の炭田による動力資源、道内および北方の林産資源を集積し、港湾を擁する地理的条件を生かして北海道の中心的な工業地域（道央新産業都市）を形成し、近代北海道の基が築かれました。しかし、燃料革命による石炭不況、さらに炭鉱企業による事業合理化や災害などにより道内の炭鉱は次々に閉山されました。1995年、歌志内市の空知炭鉱閉山により、坑内堀りの炭鉱は石狩炭田から完全に姿を消してしまいました。現在、道内では釧路市にある釧路コールマインで採掘事業と中国やベトナムなどから研修生の受入れにより、採掘技術に関する研修事業を行うのみとなりました。

一方、近年かつて炭鉱で栄えたまちでは、炭鉱施設の産業遺産を観光資源として積極的に活用し、地域を活性化させる取組みが各地で見られます。同時にそれぞれの旧産炭地には、かつて炭鉱員やその家族の皆さんが親しみ、よく食べられていた「炭鉱飯」があり、重労働と向き合う炭鉱員の皆さんがスタミナ源として仕事を終えたあとに食べ、その地域ならではの個性豊かで地味深い味わいが今なお大切にされています。

2019年、道央新産業都市の空知・室蘭・小樽などが、石炭・鉄鋼・港湾・鉄道をテーマとして結ばれて、北海道の産業革命の物語が「炭鉄港」として表現され、

文化庁より日本遺産に認定されました。「炭鉱飯」はその地域で暮らす市民のソウルフードであり、旧産炭地に興味・関心を寄せる人たちにとっては、まちの歴史を理解するための大切なグルメとしても注目され、「食」を通じてその味わいを楽しむとともに、多くの感動を創り、人々の縁をも紡いでいます。

旧産炭地で古きを尊び、「炭鉱飯」を味わう

夕張では明治21年に志幌加別川上流で「石炭＝黒いダイア」の大露頭が発見され、続いて夕張川本流を含む各所での露頭の見つけにより「炭鉱の街夕張」が幕開けしました。明治23年に北海道炭礦汽船株式会社が炭鉱を開発し、最盛期には大小24もの炭鉱を擁し、石炭産出量は年間400万tに上り、人口11.6万人を数え、石狩炭田の中核をなす「炭都」と呼ばれました。夕張市石炭博物館を訪れると、当時の炭鉱の様子とまちの暮らしを詳しく理解できます。この博物館では、石炭を



夕張市石炭博物館 「立坑櫓、模擬坑道（地下坑道の入口）」

採掘していた地下坑道を実際に歩き、石炭に触れる貴重な体験ができます。夕張の炭鉱飯には「カレーそば」があり、豚バラ肉と玉葱^{ねぎ}を使い、辛みのあるつゆが器いっぱい盛られて提供されています。このほか、市内菓子店の「お菓子のふじ」や「阿部菓子舗」では、炭鉱にちなんだ数種類のお菓子が売られています。

赤平ではかつて石炭採掘のために利用されていた住友赤平炭鉱^{やぐら}の立坑櫓および周辺施設が「赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設」として公開され、実際に炭鉱員として永年勤務した方が当時の体験とまちの様子を解説され、北海道の産業、生活文化の歴史を学べます。赤平では炭鉱員やそのご家庭で盛んに食べられた味噌^{みそ}ベースのスープに豚ホルモンや豆腐、好みの野菜等を具材とする「がんがん鍋（ホルモン鍋）」があります。鍋の名前は、2005年に市民有志「赤平の食を考える会」が市内飲食店の協力を得て命名しました。その由来は、「ストーブをガンガン^た焚いて、ガンガン煮込んで、ガンガン食べて、ガンガン語り、ガンガン働く」というもので、炭鉱文化を大切に、往時の味をいつまでも継承していこうという熱い思いが込められています。

芦別の炭鉱飯はボリュームたっぷりの具材が入った熱々のスープ「ガタタン」があります。ガタタンは旧満州^{まんしゅう}（中国東北部）から引き揚げた村井豊後之亮氏が中国東北地方の家庭料理をヒントに昭和30年代に創作したといわれています。具材には白菜、人参、玉葱、豚



夕張 栗下食堂 「カレーそば」



夕張 「炭鉱にちなんだ菓子」



赤平 「がんがん鍋の幟」



赤平 焼肉のたきもと 「がんがん鍋」



芦別 宝華飯店 「ガタタン」



芦別 三千里 「炭鉱ホルモン」



赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設 「施設見学前の説明、立坑櫓の構内」



美幌 居酒屋醍醐 「モツ串（美幌焼き鳥）、とりめしとかけそば」



肉、海老、帆立、椎茸^{しいたけ}、山菜、ちくわに小麦粉で練られた団子に溶き卵が落とされたもので、とろみのある熱々のスープが心も身体も芯からホッカリと温めてくれます。最近ではラーメンを入れたものやアレンジメニューがいくつかあります。もう一品、芦別を訪れた際、ホルモン屋で豚ホルモンを七輪の炭火で焼く「炭鉱ホルモン」をいただきました。ホルモン焼きは安価で栄養価が高く、疲れた身体を回復させることができる料理として炭鉱員の皆さんにこよなく愛されたそうで、芦別はじめ他の旧産炭地でも多く見られます。実際に味噌や醤油のもみだれで味付けされた豚ホルモンを七輪の炭火で焼き、ジュッという音と香ばしい香りが立ち上り、食欲がすすみ満腹になりました。

美唄には、今や「美唄焼き鳥」で全国的に知られる「モツ串」があります。1915年、美唄は三菱美唄炭鉱の開坑により、大小いくつもの炭鉱が開発され、全国有数の炭鉱の街となりました。1953年、三船福太郎^{みふねふくたろう}氏が焼き鳥・モツ串「三船」を開店し、一本の串に鶏のレバー、ハツ、砂肝、きんかんなど、数種類のモツと鳥皮、モモ肉など鶏のさまざまな部位を刺し、モツや肉の間は地元で多く栽培されていた玉葱で仕切りました。その後、「三船」はその弟子、孫弟子、親族が美唄駅近くの繁華街や郊外、岩見沢にて「三船」「たつみ」「福よし」などの屋号で、その味を継承しています。美唄のモツ串は、もともとは捨てられていた内臓を無駄にせず、下茹でにより臭みを消すなどの工夫を施し美味しい焼き鳥に仕立てました。こうして、美唄には貴重な鶏を余すことなく調理して大切にいただく食文化が古くから根付き、今日に至っていると感じます。モツ串を食べた^{しめ}めに、モツ串を浸した鶏だしのかけそばを食べるのも美唄ならではの食べ方ようです。このほか、美唄では明治時代に現在の美唄市中村地区に入植した農場主の中村豊次郎^{とよじろう}氏が、小作人たちの家計と健康を気遣い、鶏を与え養鶏を奨励しました。ハレの日や来客時に、その鶏をつぶし鶏肉とモツを醤油、酒、砂糖で炒めたものを米と一緒に炊き上げて振る舞われたという「とりめし」も、美唄ならではの郷土料理となっています。

三笠や歌志内では、馬の腸を味噌で煮込む郷土料理「なんこ」があります。なんこは、炭鉱員の皆さんの元気を支えた貴重な栄養源であり、かつては人が集まるお盆や正月などには各家庭で作られていたそうです。味噌仕立てでじっくりと煮込まれた「なんこ」はほどよい歯ごたえで、噛むと口の中に味噌の味が広がり食欲がすすみ、心もホッカリと和む優しい味わいです。

このほか、三笠では1945年に炭鉱技術を養成するために設置された町立北海道三笠工業学校（採鉱科）が、道立高校（普通科、工業科など）を経て、2012年4月より食のスペシャリスト養成校として再スタートした市立北海道三笠高等学校（食物調理科）があり、全国から注目を集めています。同校のレストランには、「なんこ」を提供する味処まんぶくが定休日に店舗を提供し、生徒は店舗の営業経験を積み、開業に至りました。また、旧住友炭鉱立坑槽のある幾春別地区では、かつては炭鉱員の皆さんにも人気を博した創業100年を超える老舗食堂がコロナ禍で長期休業しましたが、地域おこし協力隊を経た店主が店舗を引き継ぎました。このほか、三笠高の卒業生が市内で飲食店を開くなど、三笠ではかつて炭鉱で賑わった往時を取り戻すように、「食」を通じた新たな息吹に溢れています。



三笠 味処まんぶく「なんこ」



三笠高校「高校生レストラン」



三笠 奔別「奔別炭鉱の立坑槽」



三笠 幾春別「更科食堂」

南空知の田園カフェで新たな味わいを楽しむ

もう一つ、南空知に増え続ける田園カフェにも注目したいところです。南幌町はコロナ禍以降に移住者が急増し、2023年、2024年と連続して日本人移住者が北海道内で最多となり、全国町村でも最大の増加率を記録しました。2024年1月には、内閣府より令和5年度「地方創生応援税制（企業版ふるさと納税）」に係る大臣表彰^{大臣表彰}受賞など、目覚ましい変化が見られます。

また、この南幌町はじめ、南空知地方のまちには、近年、離農した古民家を店主自ら時間をかけて改修して田園カフェやレストランを営む移住者、札幌などに住まいを置きながら店舗を経営する事業者なども増え、人気を集めています。南空知は札幌や新千歳空港からも車で1時間程度のアクセスの良さに加え、のどかな田園風景が広がる抜群のロケーションも魅力です。

由仁町や栗山町では、サツマイモ栽培に取り組む生産者で構成される「そらち南さつまいもクラブ（代表：川端祐平氏）」が、栽培品種の紅あずまを「由栗いも」としてブランド化も図っています。由仁町の諸国料理店「パザール・パザール」では、地元生産者等の熱い想いのバトンを受け継ぎ、由栗いもを料理やデザートとしてレストランで提供しています。のどかな風景を借景に、こだわりある地元の食財をゆっくりと美味しくいただける味わいと至福のひとつときは格別です。

空知にはこうした新たなカフェやレストランに加え、今回はご紹介できませんが、ワイナリーも非常に多く誕生しており、最近ではウイスキーやジンの蒸留所も登場しています。このほか、長沼町で5代にわたり林檎栽培^{りんご栽培}に取り組む生産者が営む、ログハウスで人気の行列ができる「ファームレストラン ハーベスト」や、栗山町には1878年に札幌で創業し、1900年に栗山に移転した造り酒屋「小林酒造」、1913年創業で起備団合の名称で100年以上にわたるロングセラーの銘菓を製造販売する「谷田製菓」など、老舗の銘店^{ひも}もあります。

古き銘店を訪ねまちの歴史や文化を紐解き、新しき味わいと車窓から広大な景色も楽しめる空知、休日にマップを片手にゆっくり空知を旅してみませんか！



南幌 古民家カフェ 「一尺五寸」



由仁 諸国料理店 「パザール・パザール」



長沼 古民家カフェ 「shandi nivas café」

流水の妖精クリオネ



桑原 尚司 (くわはら たかし)

北海道立オホーツク流水科学センター 学芸員

北見市生まれ。1998年、北里大学水産学部(現海洋生命科学部)卒業。2009年より現職。2012年より紋別高等学校時間講師。2014～2016年、東京農業大学オホーツクキャンパス非常勤講師。2018年より漂着物学会運営委員。2025年より紋別市文化財調査会委員。クリオネ常設展示などの科学館運営、科学教室、講演会、出前事業などに従事。著書に「クリオネのはなしー世界で初めてのクリオネ専門書ー」(共著、2025、成山堂書店)がある。

はじめに

クリオネは流水の妖精、天使とも呼ばれ、北海道オホーツク海沿岸で冬の風物詩となっています。現在は各地の水族館で見ることができ、可愛い泳ぎで人々を楽しませています。しかし、海洋生態系におけるクリオネの存在は重要とされていなかったため研究が進んでいませんでした。本稿では現在までに解明されているクリオネの分類や生態などを紹介します。

分類

生物分類の基本は大きなグループから界、門、綱、目、科、属、種の階級となります。クリオネは「生物界」、イカ、タコ、貝などを含む「軟体動物門」、「腹足綱」に分類されます。「腹足綱」とは巻き貝のグループです。クリオネは巻き貝の仲間ということになります。次に、泳ぐときに使う羽のような翼足を持ち、殻が無いことから裸殻翼足目(無殻翼足目)に分けられます。そしてハダカカメガイ科、ハダカカメガイ属と分類されます。種名ですがハダカカメガイ属は現在4種が知られています。したがってクリオネと呼ぶと4種のうちどれを指しているかはっきりしないことになります。種を指定したい場合は世界共通の名前である学名か、日本共通の名である和名(標準和名)で呼ぶ必要があるのです。

ここで4種のクリオネを紹介します。

- ・ *Clione limacina* (Phipps, 1774) クリオネ リマキナ (フィップス, 1774)

(和名：ダイオウハダカカメガイ)

北極海から記載された本種は、世界最大のハダカカメガイです。体長は約80mmに達することから、ダイオウハダカカメガイとの和名が付けられました。北極圏および北大西洋に生息しています。

- ・ *Clione antarctica* E. A. Smith, 1902 クリオネ アンタクトイカ スミス, 1902

(和名：ナンキョクハダカカメガイ)

南極大陸のロス海から記載された本種は、南半球の極域に生息する唯一のハダカカメガイで、南大洋に広く分布します。体長は約42mmとなります。種小名の「antarctica(南極の)」を由来として和名が付けられました。

- ・ *Clione elegantissima* Dall, 1871 クリオネ エレガントイッシーマ デール, 1871

(和名：ハダカカメガイ)

本種は2017年にカムチャッカ西岸沖(北太平洋)で記載された学名が有効となり種小名が変更されました。北太平洋に分布し、北海道のオホーツク海沿岸でも見られます。水族館でよく展示されているクリオネが本種です。

・ *Clione okhotensis* Yamazaki & Kuwahara, 2017 クリオネ オコテンシス 山崎&桑原, 2017

(和名：ダルマハダカメガイ)

北海道紋別市沿岸のオホーツク海から115年振りに新種記載された本種は、世界最小のハダカメガイ属で、体長は約8mmとなります。体のほとんどが赤く、体の形が「ダルマ」を連想させることに由来して和名が付けられました。

このようにクリオネは4種に分類され、このうち2種を北海道オホーツク沿岸で見ることができます。海岸線で見ることができるのは、クリオネを運ぶ冷たい海流が来る冬季です。

また、2017年に日本海の富山県沖水深300mの深海でこれまでの4種と遺伝的に異なるクリオネが見つかっていて、現在は新種登録の審査中です。

生物学的な分類ではなく、水生生物の生活型で分類すると、浮遊生活を送るプランクトンになります。プランクトンとは遊泳力を持たないか、水流に逆らうほどの遊泳能力を持たない生物の総称です。生物の種類や大きさは問いません。他の分類では遊泳力のあるものをネクトン、底生生物とも呼ばれ水底で生活するベントスなどがあります。

プランクトンであるクリオネは、流されっぱなしの人生を送ります。流水の妖精などと呼ばれ、確かに流水期にクリオネは多く見られますが、流水にしがみついて来るわけではありません。流水を運ぶ海流の影響

が強くなる時期、その海流にクリオネが含まれているので流水期にクリオネを多く見ることができるのです。したがって、クリオネが含まれるこの冷たい海流が来れば、流水が見られる前の12月、去った後の4月でも見られることがあります。

クリオネの発見

クリオネと聞くと、流水期のオホーツク海など冷たい海を思い浮かべる方も多いのではないかと思います。クリオネが初めて記録されたのは、17世紀後半1675年にドイツで出版された書籍「Spitzbergische oder Groenlandische Reise-Beschreibung, gethan im Jahre 1671 (1671年に行われたスピッツベルゲン島およびグリーンランド島への航海記)」です。著者であるフリードリッヒ・マルテンス (Friedrich Martens) は、1671年に北極圏にあるノルウェー領スピッツベルゲン島に向かう捕鯨船の航海に参加し、北極域の多くの動植物を図にしました。そのなかで海洋生物をまとめたスケッチのなかに、クリオネと考えられる生き物が描かれています。この時代は動物に統一した学名を付ける概念がなかったので名前はまだありません。世界共通の名前である学名が確立されたのは、分類学の父リンネが1758年の「Systema Naturae (自然の体系)」第10版で、生物の種名(学名)を属名+種小名の2語のラテン語を用いて表す二名法を採用し、国際動物命名規約において、この本の出版日以降の学名を有効としてからです。

1773年にイギリスの探検家コンスタンティン・フィップス (Constantine Phipps) は、1773年に北極域へのイギリス海軍の遠征を指揮し、その航海記録「A voyage towards the North Pole (北極への航海)」を翌1774年に出版しました。この本のなかで、はじめてクリオネを *Clio limacina* (クリオ リマキナ) と記載しました。種小名のリマキナはラテン語で“ナメクジ (Limax)” を意味します。属名の *Clio* (クリオ) はアイルランド出身のパトリック・ブラウンが殻を持つ有



Clione limacina (和名：ハダカメガイ)

殻翼足目の生き物に「*Clio*」と名前を付けたことが元となっています。*Clio*はギリシャ語のクレイオーのラテン語表記で、意味は海の精霊Nereids（ネレイド）と呼ばれる海のニンフ（妖精）の一人です。前述のブラウンはゼラチン質な海洋生物に海の精霊Nereidsの姉妹の名を次々に付けていき、そのなかのひとつが*Clio*でした。クレイオーは歴史を司る文芸の女神ミューゼの一人としても知られているため、クリオネが優雅に泳ぐ姿から名前が付けられたと思われがちですが、それは違うということになります。現在、クリオネの属名は、ドイツ出身のペーター・サイモン・パラスが付けた*Clio*を変化させた*Clione*が採用されています。

生態

クリオネは軟体動物であり骨格を持ちません。体は左右対称で一部がゼリー状となっています。頭には2対の触手があり、その奥のなかには餌を捕らえるための器官である、3対6本のバックルコーン（口円錐）、鉤囊^{かぎのう}、そして巻貝の多くに見られる硬い舌のような歯舌があります。歯舌は種によって形や配列が異なります。歯舌より胴体側には唾液腺があり、食道が消化器官に伸びています。胴体の赤またはオレンジに見える部分は、消化系の臓器や生殖腺、循環器の心臓などです。消化腺からは短い腸が体の前方にある肛門へと繋がっています。泳ぐときは翼足と呼ばれる羽のようなものを筋肉により動かします。ストロークの度に下へ打ち付けるように動かすことで上向きと前方への推進力を生みだします。

クリオネの一生は*Clione limacina*（ダイオウハダカメガイ）で詳しく調べられてきました。クリオネは雌雄同体で、オスとしての生殖器官の発達が初めに起こり、その後にメスとしての卵巣の発達が起きます。交尾は2個体のペアが腹側でくっつき、それぞれのオスの生殖器を交尾相手の生殖孔に挿入して、精子をわたすことでお互いに受精します。このような生殖方法

は同じ軟体動物のナメクジやウミウシでも見られます。交尾後、卵はゼラチン状の塊に産みつけられ、3～4日で孵化^{ふか}すると考えられています。殻をもたない巻き貝と紹介しましたが、生まれてすぐは殻があります。孵化した幼生はベリジャー幼生と呼ばれ他の巻き貝のように壺状^{つぼ}の殻を持っています。その後、2週間ほどで殻を捨てて、体を囲む3本の繊毛帯で泳ぐポリトローカス幼生（多輪形幼生）となり、そして翼足が大きくなり、繊毛帯が消えて成体となります。クリオネの寿命はわかっておらず、水族館や実験などでは飢餓状態で1年以上生きた記録があります。飢餓状態に強い理由に脂肪の蓄積があります。クリオネを拡大して見ると体中に脂質をため込んでいる粒である油球が見られます。

生態系のなかのクリオネ

クリオネは有殻翼足目の*Limacina*（リマキナ）属のみを餌としています。リマキナ属は殻を持つ巻き貝で翼足をパタパタさせて泳ぎます。クリオネが餌を食べるときは、まず通常は頭部に収まっている3対6本のバックルコーンが膨張して飛び出し餌を捕まえます。この時、鉤囊から飛び出した鉤針^{かぎばり}が相手に刺さり、歯舌を使って食べ進めていきます。*Clione okhotensis*（ダルマハダカメガイ）は餌を捕まえるときにバックルコーンを使いません。探索行動と呼ばれる行動を行った後、鉤針で相手を刺します。食べ方に違いがあるにせよ可愛い姿のクリオネですが食性は肉食となります。



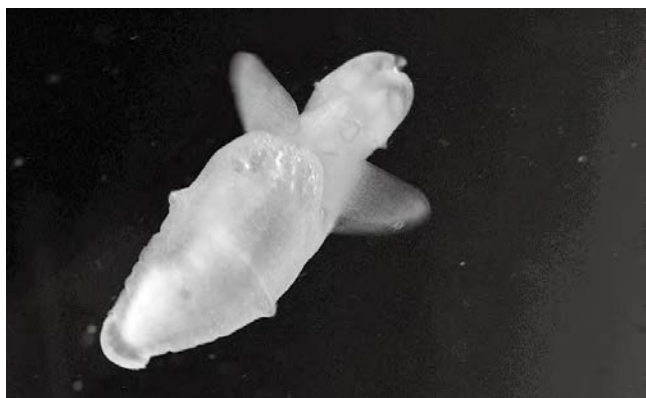
ハダカメガイの食事シーン

* 鉤囊

裸殻翼足目に特有の器官でリマキナを食べるときに相手に突き刺すキチン質の鉤針が収納されている。

クリオネの腹部は赤またはオレンジ色に見えます。これはカロテノイドという色素由来の色です。クリオネの餌であるリマキナは植物プランクトンを食べ、カロテノイドの成分を体内に取り込みます。クリオネがリマキナを食べて、この成分をベクテノロンという赤いカロテノイドに変換します。サケが回遊中にクリオネを食べることは知られていましたが、サケの身からもベクテノロンが見つかりました。このように色素から食物連鎖が解明された研究報告もあります。皆さんもサケを食べたときに巡り巡ってクリオネ成分を取り込んでいるかもしれません。逆に南極に生息する魚はほとんどクリオネを食べません。これは*Clione antarctica*（ナンキョクハダカカメガイ）が、魚が嫌うプテロエノンと呼ばれる忌避物質を持っているからです。南極海に生息する端脚類のクラゲノミの1種はクリオネを脚で刺し背負います。これは背負うことで自身が魚から食べられることを防いでいると考えられています。

リマキナは海洋酸性化の影響で殻が溶けるという影響を受ける、すでに受けているとの報告があります。大気中の二酸化炭素が増えると海中の二酸化炭素も増加します。また、二酸化炭素は冷たい海のほうが溶けやすく、海洋酸性化は北極海や南極海で進行が早いと考えられています。海中の酸素が増えるとpH（水素イオン指数）が下がり酸性に近づきます。酸性化が進行することで殻の成分である炭酸カルシウムが溶けて



Clione okhotensis（和名：ダルマハダカメガイ）

いくのです。リマキナの殻が溶けて薄くなり、弱ることでもリマキナを餌とするクリオネにも影響がでます。また、クリオネ自身も孵化直後は殻を持っています。海洋酸性化はクリオネの危機なのです。

採集

クリオネは天然記念物などに指定されておらず、採集は自由です。しかし北海道では40cm未満のたも網に限られるなどの道具に関する規則があります。クリオネが海岸で見られる流水期の海水温はマイナスになるなどとても冷たく、落ちると低体温症で命に関わる危険があります。また、流水の上に乗るのも危険があります。大きく見える流水も横から見ると薄く割れやすいものも見られます。立ち入り禁止の場所に入らないなどのルールを守り、細心の注意を払う必要があります。

ここまでクリオネの生態などを紹介しました。これからクリオネを水族館などで見た際には、生態系の多様な繋がりや海洋環境などにも思い馳せていただけると幸いです。

参考文献

- ・高橋邦夫・桑原尚司・國本未華・山崎友資（2025）クリオネのはなしー世界で初めてのクリオネ専門書ー。成山堂書店
- ・Lalli, C. M., Gilmer, R. W. (1989) Pelagic Snails: The Biology of Holoplanktonic Gastropod Molluscs, Stanford University Press, California.
- ・Yamazaki, T., Kuwahara T. (2017) . A new species of *Clione* distinguished from sympatric *C. limacina* (Gastropoda: Gymnosomata) in the southern Okhotsk Sea, Japan, with remarks on the taxonomy of the genus. *Journal of Molluscan Studies* 83: 19-26.
- ・山崎友資, 桑原尚司 (2017). ハダカメガイ属の分類. *ちりばたん*, 47: 1-4.
- ・Maoka, T., Kuwahara, T., Narita, M. (2014) Carotenoids of sea angels *Clione limacina* and *Paedoclione doliiformis*, from the perspective of food chain. *Marine drugs* 12, 1460-1470.
- ・Bednaršek, N., Feely, R. A., Reum, J. C. P., Peterson, B., Menkel, J., Alin, S.R., Hales B. (2014) . *Limacina helicina* shell dissolution as an indicator of declining habitat suitability owing to ocean acidification in the California Current Ecosystem. *Proceedings of the Royal Society B* 281: 20140123.

地域の歴史とアイデンティティ

「いま、この場所で、仲間とできることをやる」

庭山 貴行 (にわやま たかゆき) さん

1974年室蘭市生まれ。青山学院大学経済学部卒業後、東京で雑誌編集、デジタルコンテンツ制作・情報配信、マーケティング・広報、フリーライターなどを経て、2013年に室蘭に戻り起業。カラダにやさしい焼き菓子和パンの店『ナニナニ製菓』を営みながら、北海道室蘭・西胆振地域からの食と文化の情報発信に力を入れている。3人の息子たちの父。趣味は映画鑑賞、溪流釣り、温泉めぐり。

店舗の前で。窓には地元イベントのポスターがずらり

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。36回目となる今回は、2016年に室蘭工業大学の清水一^{しみずかずみち}道・元教授とのコラボで作り上げた「鉄^{てつ}の素」クッキーの開発をはじめ、地域のアイデンティティやそこに関わる人たちの誇りを大切に、地域愛をベースにしたワークシェアリングを実践する、庭山貴行さんです。

Uターンのきっかけを教えてください

主な理由として2つあります。子どもが生まれたことで、パティシエをしていた妻が、子どもに安全安心なものを食べさせたいと、オーガニック・無農薬といっ

た食材に注目するようになりました。2つ目は、東京ではなかなか手に入らない、良質な食材が、室蘭やその周辺では比較的身近にあることを帰省した時に気がついたのです。この辺りって、野菜に果物、魚、肉、乳製品となんでもあり、全国レベルの質の良いものがたくさんあり手に入りやすいと気づきました。生産者と出会い、こだわりや情熱を持っていることも知り、西胆振の食材の魅力を発信しながらお店をやるのも面白いかなという気持ちが芽生えました。

移住までの準備はどんな感じでしたか？

移住に関しては、3～4年前から準備を始めていました。パティシエの妻とともに西胆振の食材でパンやお菓子を作って売ろうと考えていたので、室蘭にどれくらいパン・お菓子のお店があって、人口比は東京とどれくらい違うのかなど、マーケティングリサーチ的

なことにも時間をかけました。起業に関しては、行政の窓口や商工会議所などで行っている独立支援や助成金をしっかり調べて、利用しました。

地域の人たちとの関わり方を教えてください

地域の会合などに顔を出して、地域の役職や仕事はできるだけ受けるようにしてきました。移住当時自分は30代後半でした。上の人と下の人をつなげる重要な世代なので、頼まれごとをした時には、照れたり遠慮したりせず、どんどん関わっていくようにしていました。帰ってきた当時は母親もおり、高校まで室蘭育ちだったから友達もいますし、IターンやJターンの人に比べたら受け入れられやすい環境だったとは思いますが。

地域の仲間との熱いプロジェクトが途切れませんね

はい。同じ時間や体験を共有することで生まれる絆から新しい何かが生じる瞬間をずいぶん見てきました。取り組んだ順で振り返ると、室蘭VOX、西いぶりファーマーズマーケット、DRIVE IN 花火大会、URBAN TAKIBI、ウォークブル・イン・ナカジマ、中島フェス…など。こうした地域の仲間と取り組むプロジェクトは、儲かるか儲からないかという視点では、間違いなく儲からない。何より大切な時間も使います。でも、“人と人との出会いは奇跡、それはつまり愛だ！”なんて、真面目に語り合える仲間がいて、みんなの想いが詰まっている準備期間、当日そして次の企画を考えている時間は最高なんです。だから、やめられないのかもしれない。ただ、この12年で自分が発案したイベントの多くは、僕よりも継続する力があり、もっと良いイベントに育てられる人たちに引き継いでいきたいと思っています。

譲れない、引き受けてもらえないプロジェクトは？

「シアタープロジェクト室蘭VOX」です。僕はプロジェクト型劇団と呼んでいます。室蘭及び、西胆振地域での舞台芸術や文化芸術活動の開催を支援するために2013年に設立した団体で、初代代表は母でした。市民向けワークショップを行い、プロの役者数名と市民公募で10～20人ほどの役者や裏方で舞台を作り上げていきました。20～50人のチームが必要で演劇一本やる

と、立場も年齢も違う人たちがすごく仲良くなって、それが続くのです。

本で鉄の町の歴史を読むよりも、劇を見るとストーリー（物語）として伝わるので、大人も子どもも感動しているのが伝わってきます。世代間のコミュニケーションの懸け橋になっているのかな。地域の歴史が演劇を通じて、後世につなげられることは意義があります。演劇が及ぼす地方都市への可能性が見えるから続けていきたいのです。

「鉄の人～室蘭の製鉄業の祖 井上角五郎の半生～」 「波濤～北の海運王・栗林五朔と栗林商会の物語～」 について教えてください

明治から昭和にかけて、日本の近代化を支えてきた歴史のひとつが、北海道の「炭鉄港」でした。空知地方で採掘された「石炭」を室蘭の「鉄鋼」、室蘭・小樽の「港湾」、これらをつなぐ「鉄道」。これは北の産業革命とも呼ばれ、北海道はもとより日本の発展に大きく貢献しました。日本の近代化で重要な位置を占めた炭鉄港は、室蘭の人たちの誇りです。これに真正面から取り組んだ演劇が2つの作品です。『波濤』は2022年12月の初演は演劇でしたが、その後は朗読劇として小樽市や室蘭市で上演しています。何もないところに製鉄所を作った人、港の発展のために尽力し続けた先人たちの精神に触れる機会を作ること、次の世代の若い人たちにシチズンプライド*の醸成ができるはずと信じています。

限られた自分の時間を考えると、今ここでやらなければならないもの、この場所でなければならないこと以外をやる時間はないのかなと思っています。

(2025年9月取材)

インタビュー後記

庭山さんと初めてお会いしたのは2023年の秋、登別でのまちづくり研修会だったと思います。名刺交換し立ち話をした時に、お菓子屋さん？いや、もっと枠を超えた動きをされている方に違いないとピンとききました。今回、お話が面白すぎて予定の3倍もの時間を頂戴しました。自分が育ったまちへの愛、誇り、仲間への信頼を感じ、庭山さんと室蘭から目が離せなくなりました。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表

* シチズンプライド

自分たちが暮らすまちを誇りに思い大切にしたいという気持ち。

美唄市の“美しさ”を 新たな視点で見つけ、 世界に届ける広報に



加藤 優菜 (かとう ゆうな)

新潟県燕市出身。関西外国語大学で英語を学び、大学3年次にイギリスのリーズ大学に交換留学。留学先では古代史を専攻し、2025年に大学を卒業。4月から株式会社FoundingBase兼美唄市地域おこし協力隊。趣味は、読書とカフェ巡り。食べることが大好き。

はじめまして。美唄市地域おこし協力隊の加藤優菜です。私は2025年4月1日に美唄市に着任し、「美唄シティプロモーション推進事業（以下、美唄シティプロモーション）」に携わっています。新潟県燕市で生まれ育ち、大阪の大学で英語を専攻していました。大学時代にはイギリスへの留学も経験する中で、日本の素晴らしさに改めて気づき、日本の魅力を世界に発信したいと思うようになりました。

【美唄市を選んだ背景】

私が美唄市の地域おこし協力隊になったきっかけは、美唄シティプロモーションを委託されている株式会社FoundingBaseとの出会いです。FoundingBaseは、「地域共創」を掲げ、地域に根ざした事業を通じ、まちづくりに取り組む企業です。日本の魅力を見つめ直していく中で、事業内容に興味を持ち、美唄市と連携して進められている本事業を知りました。

美唄市は札幌と旭川のほぼ中間に位置し、かつて炭鉱で栄え、現在は農業が盛んに行われています。最盛

期は9万人を超える人口がいましたが、2040年に1万人まで減少するという予測がされ、新たな動きが求められていました。

そこで2022年から、まちへの愛着であるシビックプライドの醸成と関係人口の創出を目的とした、美唄シティプロモーションが始動。その第一歩として、10代から30代の若者による委員会が立ち上がり、新たなまちのブランド『Bibai Be Beautiful 美しくあれ、美唄。』を制作しました。美しさとは、逆境の中でも、地域に根ざし、協働しながら挑戦を続ける姿勢を表しています。

逆境の歴史を踏まえ、「美しさ」を軸に新しいまちづくりに挑戦している美唄市は、私にとっても新しい挑戦ができる場所だと魅力を感じました。大学を卒業してすぐに地域に飛び込むのは不安でしたが、FoundingBaseの業務マネジメントを受けながら活動できるという点も決め手の一つでした。

【活動内容とやりがい】

美唄に来てからは、チームで美唄シティプロモーションに取り組んでいます。私は広報という立場ですが、情報発信を行うだけではありません。まちへの愛着は、地域の魅力に気づき、まちづくりの活動に主体的に関わることによって高まっていくと考え、市民の皆さんと共に活動を共創することも並行して行っています。市民主体の活動が活発になるにつれて、市内外への情報発信が強化されるという順序で進めています。

具体的な活動は多岐にわたります。本事業は4年目に入り、まちづくりへの参画をより広げたいと考え、各自治会を回って事業説明を行っています。地域の方との交流を通して、事業や私自身のことを知ってもらい、活動に興味を持ってもらえるよう、関係性の構築に努めています。また、多世代が交流する場を創出するため、複合商業施設内でコミュニティスペースを運営し、ワークショップやボードゲームなど幅広いジャンルのイベントを実施しています。子どもからお年寄りまでが一緒になって楽しめる企画を通じて、世代を超えたつながりが生まれる瞬間に、大きな喜びを感じます。



地域の自治会へ事業の説明と意見交換

さらに、若い世代のまちづくりへの参画を促すため、子どもたちがまちづくり活動を行う「美唄まちづくり部」の伴走をしています。活動の一環で、地元のお祭りを盛り上げるためのイベントをイチから企画したり、美唄市公式YouTubeのアナウンサーを務めたりしています。子どもたちとの向き合い方で戸惑うこともまだ多いですが、子どもたちの自由な発想にはいつも驚かされます。未来の美唄を担う子どもたちが、自分たちの手でまちを面白くしていく姿を見ることも、やがていの一つです。



美唄まちづくり部の活動（小学生から高校生を対象）

そして、これらの活動を文章や映像で記録し、広報誌やSNSを通じて発信しています。市民の方々とともに創り上げた魅力を伝えることで、「楽しそうだから自分も関わってみたい」という市内外の方からの反響はもちろん、「こんな素敵な活動が地元にあったんだ」といった住民の方々からの声もいただくことがあります。

【美唄市に暮らしていて感じること】

活動を始めたばかりのころは、美唄の歴史や文化について知らないことが多く、どのように魅力を伝えれば良いか悩むこともありました。美唄のまちを歩いていると、「この建物は何だろう?」「この場所にはどんな歴史があるのだろうか?」と疑問に思うことが多々ありました。そんな時、市役所の職員さんや地域の方が気さくに話しかけてくださり、「ここはね、昔はこうだったんだよ」「実は美唄にはこんなものがあるんだよ」などと、たくさんのことを教えてくださったおかげで、少しずつ理解を深めることができています。

美唄の好きなところは、自然と人の距離の近さ、人同士の距離の近さです。美唄の景色では、特に夕焼けがお気に入りです。なんてことのない日常が、私にとっては美唄に来てよかったと感じる瞬間です。また、美唄の食も大きな魅力です。新鮮な野菜や果物、そして何よりも「美唄焼き鳥」の美味しさには驚きました。地域の方から野菜をいただいたり、一緒に焼き鳥を食べたり、美唄ライフを満喫しています。

【将来の展望】

美唄市はほかの自治体の例に漏れず、人口減少や高齢化といった逆境に置かれていますが、「美しさ」を掲げ、まちが一丸となってまちづくりに取り組み始めています。こういった等身大の活動をリアルに伝えることが、まちの未来を担う子どもや未来の移住者、美唄を応援してくれる人々の心を動かすことにつながると信じています。

美唄市での活動はまだ始まったばかりですが、このまちの未来を市民の皆さんと一緒に創っていくことに、大きな喜びと責任を感じています。これからも美唄の魅力を発信し続け、多くの人々の心に響き、行動を促すような広報活動に努めてまいります。美しくあれ、美唄！



ワークショップで市民と作った「美唄の100人の夢」

“ひと”と“まち”を繋ぎ、未来を紡ぐまちづくり

NPO法人 ひとまちつなぎ石狩

【団体の設立目的】

当法人は、まちづくりや市民活動の支援、文化継承に関する講座や地産地消を推進する事業等を行い、これらの情報を広く発信することにより市民自治力の開発に努め、行政・企業との協働も視野に入れて、市民活動の推進と地域振興に寄与することを目的として、平成16（2004）年4月に設立しました。

【まちづくりと市民活動】

石狩市より指定管理を受け、石狩市市民活動情報センター「ぼぼらーと」では、市民活動団体・市内のイベント情報の発信、印刷機の貸出等の市民活動支援や、市民図書館との連携による図書の受け渡しなど、幅広く市民の皆様にご利用いただいています。



石狩市市民活動情報センター「ぼぼらーと」

石狩市内の福祉事業所で製造したパンやお菓子、また農家さんの野菜や果物の販売、市内在住の作家さんの風景画・植物画などのアート作品を紹介しています。さらに、高齢化する町内会活動に寄り添った提案や、市民のニーズに合った講座や講演会の企画などを行っています。

事業では、「地産地消の促進」や「地域の歴史・文化の継承」に関わるまちづくりをはじめ、まちづくり団体の運営に関する相談など、市民活動をサポートし、また、より良いまちづくりを実現するため、行政や企業の施策を提案するなど、石狩市と協働しながら様々な事業を行っています。

石狩市との協働による代表的な事業とする『いしかり食と農の未来づくり事業』は、毎年春～秋にかけて石狩の農産物について学ぶ講座を開催し、たくさんの市民に参加いただいています。また、石狩市民図書館との協働事業では『中古本リサイクル市』も、市民の皆様から読まなくなった本を集め、次の読み手に繋いでいます。売り上げは、図書館の蔵書の購入や運営に必要な備品購入などに充て、市民に還元し、残った本は東京のNPO法人JENの『ブックマジック』に送ることにより、海外の教育支援等に役立てられています。



いしかり食と農の未来づくり事業の「季節を楽しむ地産地消講座」



中古本リサイクル市

【取り組みと成果】

まちづくりのNPO法人として、「市民力で元気なまちを！」というテーマを掲げ活動していますが、まち全体の高齢化に伴い高齢者向けの講座が中心となっています。ここ数年では、アクティブシニア向けのトレーニング連続講座を毎年内容を少しずつアップデートしながら開催しています。令和7（2025）年は、筋力を

鍛える「筋トレ」と、^{えんげ}嚥下力を鍛える「ボイトレ」を2回ずつ行い大変好評でした。講演会は、『終活のプロによる老後準備のすすめ』を開催しています。

元気なまちをつくるためには、まずそこに暮らす市民が元気であることが必要不可欠だと感じています。



アクティブシニアのためのトレーニング連続講座ボイトレ編

いしかり食と農の未来づくり事業から誕生した、市民参加型で石狩市の落花生栽培を支援する『石狩落花生研究会』は、発足から10年という節目を機に石狩市の事業から独立をしましたが、事務局を引き続き担っています。

独立を果たした今でも、「落花生を石狩市の特産品に！」という目標は健在で、事務局という立場で“ひと”と“まち”を繋いでいます。



石狩落花生研究会10周年記念祝賀会

令和元（2019）年に石狩市の持つ魅力を、まず石狩市で暮らす人たちに知ってほしいという想いで企画したイベント『まちフェスいしかり』では、市民が主体となった実行委員を立ち上げ、石狩市内の飲食店、生

産者、福祉事業所、ハンドメイドを楽しむ市民に呼びかけ、回を重ねるごとに来場者数も増加し規模が拡大していています。

「第6回まちフェスいしかり 〜つなぐ、つながる∞まち、未来〜」は、令和7年11月16日（日）10時～15時に花川北コミュニティセンター内で開催を予定しています。出店者の9割が、石狩市民または石狩市に所在する店舗や団体に、まさに「石狩市民のためのイベント」に成長してきたと感じています。



まちフェスいしかり名物「石狩産野菜詰め放題」

【未来を紡ぐまちづくり団体へ】

石狩市市民活動情報センターに来館される方たちの求めていることにアンテナを張り巡らせ、企画していきたいと思っています。

どの団体でも共通している課題ではありますが、次の世代に繋いでいくことが重要です。まだ先のことと考えず、今の自分たちが行っていることすべてを繋いでいくため、ひとつひとつの出会いを大切に事業を行っていききたいと思います。

初心を忘れることなく、「ひとまちつなぎ石狩」という名に恥じないように。

ひととひと 手をつなぎ
ひととの 出会いをつくり
元気なまちに
住みたいまちに
豊かな地域を めざします



NPO法人 hitomachi tsunagi 石狩

<https://blog.canpan.info/hitomachi3213/>

藤村久和先生と アイヌ文化研究

佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。



このシリーズのもととなっている勉強会「アイヌ文化を読む会」では、藤村先生のご逝去以降、11年前に勉強

会を始めたところからの先生のご講演の録音を聞き直して学んでいます。先生がなぜアイヌ文化を研究するようになったのかや、その後のご研究のきっかけも話題とされたことがあったのでご紹介します。

藤村先生は北海道学芸大学（北海道教育大学）教育学部で学ばれましたが、学生時代の指導教授の本棚にあったアイヌ関係の文献を読み、アイヌ文化に興味を持ったそうです。その後厚田村や石狩町（当時）の小学校教員として勤務されるかたわら、アイヌ語地名研究者として著名な山田秀三氏^{やまだ ひでぞう}やアイヌ文化研究家で詩人でもあった更科源蔵氏^{さらしなげん ぞう}の勉強会に参加されていました。そのような経緯から、現在の北海道博物館の前身である北海道開拓記念館のアイヌ文化担当として関わられることになりました。

当時の展示内容は十分ではなく、特に信仰分野についての情報は沙流川付近に偏っており、道東地域のものが欠落している状態でした。そこで、道東地方の古老を中心に訪ね、聞き取りを始めたそうです。聞き取りは、忙しく働く昼間よりも夜のほうが都合がよいということになり、時には夜中の1時、2時に及び、話者のご自宅に泊めていただくことも珍しくなかったと言います。そのなかで、地域により細部の違いはありましたが、互いに交流のない人々から聞き取った生活習慣、人間と動物の関わり、神についての考え方に共通した流れがあることに気がつかったということです。アイヌの人々は遺骨の盗掘問題や研究者に都合よく利用されたという思いもあったため、心を開いて話をしてもらうのは簡単ではなく、本音を聞くのは難し

かったそうです。忍耐強く行った聞き取り活動を通じて、藤村先生は、文化は目に見えるものがすべてではなく、外から観察

しているだけでは表面的な情報しか得られないと感じられました。このようにして作成された藤村先生の調査報告書が、哲学者であり、歴史研究家としても著名な梅原猛氏の縄文時代の考察に多大な影響を与えたことは梅原氏自身が多くの著書で述べています。

梅原氏は、縄文文化は日本の基層文化であると考えていましたが、縄文人は文字による記録を残さなかったため、遺跡や遺物からだけではわからない点が多くありました。梅原氏が札幌市芸術の森開設準備のため札幌市を訪れた際、神道や仏教などの宗教以前の信仰を知りたいと要望され、藤村先生が、現在は世界文化遺産を構成する縄文遺跡の一つである千歳市のキウス周堤墓群や縄文早期からアイヌ期までの遺跡を含むウサマイ遺跡にご案内し、また、古老からの聞き取り調査報告書も梅原氏に渡しました。報告書を読んだ結果、梅原氏はアイヌ文化を通して、縄文文化に関する数々の疑問点についての答えを得られたということです。詳しくは、『アイヌと古代日本：シンポジウム北方文化を考える』^{え がみ なみ お う え や ま し ゅ ン べ い}（江上波夫、梅原猛、上山春平[発起]、1982年）や、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛、藤村久和編、小学館、1990年）等をご参照ください。藤村先生と梅原猛氏は、アイヌ文化が縄文文化の流れを汲むものであるということについて当時から一致しており、この見解は近年著しく進んだゲノム分析の結果にも沿うものです。日本列島の歴史においてアイヌ文化がどのような立ち位置を占めるかについては、これまで学問的に十分に研究されてきたとはいえ、進展が待たれます。

*本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏（1940-2025）元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごはん』（監修、デーリイマン社、2019年）、『平成20～令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査 1～16』（北海道教育委員会、2008～2025年）等。

北海道農業の代名詞を目指して ～長沼町の発信～

木村 将人さん (きむら まさと)

ながぬま農業協同組合 青年部 部長

鈴木 大晴さん (すずき たいせい)

ながぬま農業協同組合 青年部 事務局

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

今回は「わが村は美しくー北海道」運動第6回コンクールで奨励賞を受賞した「ながぬま農業協同組合青年部」の木村部長、鈴木事務局にお話を伺いました。



木村部長

《イベントが目白押し》

長沼町は、空知地方の最南端に位置し、新千歳空港から29km、札幌中心街からは32kmにあり、畑作風景や田んぼが広がり、牧場や丘の上にあるカフェ、キャンプ場や温泉など北海道を満喫できるまちとなっています。

現在、ながぬま農業協同組合青年部の盟友（同志）は66名で、平均年齢30代前半の若さあふれるメンバーで構成された団体です。

長沼町はイベントも多く、一本橋を向かい風の中突き進む名物競技「やませ」で盛り上がる「マオイ夢まつり」、夕やけが落ちる通りに縁日が出現する「夕やけ市」、実りの秋の「収穫祭」など、ながぬま農協、長沼町、商工会等が一丸となってお祭りを盛り上げ、毎年どれも大盛況です。



チカホでのブロッコリー直売会の様子



豆腐直売の様子（ながぬま農業協同組合青年部のメンバー）

《自慢の「誉れとうふ」と食農教育》

地域貢献のために取り組んできたのが、オリジナルの豆腐販売と食農教育です。

長沼町は大豆の作付面積・出荷量ともに日本一となったこともあり、長沼産の大豆をもっと知ってもらおうと長沼産「ユキホマレ」のみを原材料としたよせ豆腐「誉れとうふ」を作り販売しています。味には定評があり、1つのイベントで200丁以上も売れるほど大人気商品となっています。

また、大豆を通して食農教育も行っています。小学校の授業の一環として、農家の農機具の見学などを交え、大豆のは種→収穫→選別→豆腐作りまでを春から秋にかけて指導しています。



食育授業の様子

《都市近郊型農業をPR》

長沼町は、新千歳空港からも近いと、朝採れた作物を空輸でお昼に道外へ出荷することも可能です。

長沼町観光協会が謳う「^{うた}となりのながぬま」のとおり、すぐそばに北海道の農業を感じられるをコンセプトとして、「北海道の農業といえば長沼町」と言われたいと、農業体験をしているような迫力満点の動画や活気あふれるイベントの様子などSNSを使って世の中に配信しPR活動をしています。

JAながぬま青年部のInstagramはこちら



@JA_NAGANUMA_SEINENBU

※当協会ホームページ、「わが村は美しくー北海道」運動第1～9回受賞団体の活動概要をまとめた冊子『生産空間の活性化に資する地域事例集』をご覧ください。



(一財) 北海道開発協会

旭川市立大学・旭川市立大学短期大学部との連携協定の締結

一般財団法人北海道開発協会は、10月14日に旭川市立大学・旭川市立大学短期大学部との間で包括連携協定を締結しました。

札幌市内で行われた締結式では、当協会の町野和夫会長と三上隆学長とが協定書に署名をしたあと、この様子を見守っていた双方の関係者も加わって、記念撮影が行われました。

今回の締結のきっかけは、当協会の開発調査総合研究所が行う「北海道における地域コミュニティに関する調査研究」という研究です。この研究のため、四人の大学研究者の方々に委員となっただき、地域コミュニティ研究会がつくられたのですが、この研究会がヒアリングを続ける中で、旭川市立大学の大野剛志教授との情報交換を行う機会がありました。その後、大野教授は、旭川市において、大学と市の共催によるこれからの町内会の姿を考えるシンポジウムの企画を担当され、そのご提案で地域コミュニティ研究会の委員のうち三人が登壇しました（その模様は、本誌8月号及び9月号に収録。当協会のホームページにも掲載されています）。

このようにして交流を続ける中で、連携協定締結の話が持ちあがるに至ったのです。

協定に基づく具体的な連携の中身はこれから調整していくことになりますが、拠点が旭川と札幌とに分れている両者は、大いに相互支援ができるものと考えています。また、道内の各地域においては、その地域に立地する各大学が、その地域の将来を担う若者を育成していくことが極めて重要です。そのことに精力的に取り組んでいる旭川市立大学及び短期大学部との協力関係を通じて、当協会としても地域に対する洞察を一層深めてまいりたいと考えています。



令和7年度 地域活性化活動発表会のご案内

当協会では、非営利の市民団体が道内で行う地域活性化活動に対して、平成14年度から助成を行っています。これらの活動がさらに発展するよう、道内各地の団体等と交流・情報交換を行うネットワーク形成を目指し、「地域活性化活動発表会」を開催します。

発表会では、助成団体による活動報告や、意見交換を予定しています。
ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所
所 長 目黒 聖直

開 催 日：令和7年12月2日(火) 14:30～16:55(開場・受付 14:00～)
場 所：札幌市中央区北2条西7丁目道民活動センター「かでる 2.7」7階『730 研修室』
定 員：25名(申込先着順)
申 込 期 限：令和7年11月28日(金)まで
参 加 方 法：下記の参加申込フォームよりお申込ください。(メール、FAXでも可)
主 催：(一財)北海道開発協会

■第一部 助成活動団体による活動報告 14:40～

- ・一般社団法人 北海道マンション管理士会(R6.札幌市)
(活動名：マンション管理におけるコミュニティ活動の活性化支援事業)
- ・NPO法人 北海道教育大芸術・スポーツ文化研究所(R6.岩見沢市)
(活動名：「Nチャレンジ」を活用した空知地域の活性化事業)
- ・一般社団法人 TCN(旧：とかち地域おこし協力隊ネットワーク)(R6.池田町)
(活動名：地域おこし協力隊の十勝定着率向上に資する人的資源の情報集約および魅力発信プロジェクト)

■第二部 意見交換 15:40～

- (1) 講演 『小さなまちで地域の誇りを糧とした
まちづくりに取り組むということ』
一般社団法人 清水沢プロジェクト 代表理事 佐藤 真奈美 氏
- (2) ディスカッション

『令和7年度 地域活性化活動発表会』 参加申込フォーム

スマートフォンからのお申込はこちら

<https://questant.jp/q/4V1XCV0B>



E-mail : kenkyujo@hkk.or.jp
FAX 011-709-5225

所 属 機 関			
氏 名			
連 絡 先	E-mail :	TEL :	

《問い合わせ先》

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所 担当：中川、曾田 TEL 011-709-5213

公益信託北海道開発国際交流基金 2026年度募集要項

公益信託北海道開発国際交流基金
受託者 三井住友信託銀行

1. 助成の目的

公益信託北海道開発国際交流基金（略称「開発トラスト」）は、北海道開発事業に係る国際交流、海外経済協力等の取組に対する助成を行い、もって国際化時代における北海道開発に携わる人材の育成及び北海道開発の推進に貢献することを目的とし、平成3年5月、財団法人北海道開発協会・北海道建設業信用保証株式会社の出捐により設定された公益信託です。当信託は、三井住友信託銀行が受託し、運営委員会の意見・勧告に基づき運営されています。

本基金が有効かつ効果的に活用され、広い視野をもった人材の育成と活発な国際交流展開の一助になることを期待し、北海道の経済交流・観光交流・人材育成などに資する事案の積極的な応募をお待ちしています。

2. 助成対象事業

2027年3月31日までの期間に実施される以下の4つの事業を助成対象とします。

（1）派遣事業

北海道開発事業に関連し下記の目的で行われている国際交流にかかる費用の一部を助成します。

- ① 先進地域調査
- ② 経済協力・開発協力
- ③ 学術調査・研究
- ④ 海外の政府機関、国内外の教育機関又は研究機関及び北海道内の国際交流団体の実施する研修

（2）受入れ事業

海外から来日している地域開発に係る研修者・研修生を北海道に招聘する際に必要な費用の一部を助成します。

（3）コンベンション事業

北海道内で開催される国際的なコンベンション事業に対して、必要な費用の一部を助成します。

（4）国際化資料作成事業

北海道の国際化に資する資料（定期的な刊行物を除く）の作成に必要な費用の一部を助成します。

3. 助成金額

総額 340万円以内。

いずれの事業についても助成対象経費の2分の1以内とします。ただし、助成金の上限は、各事業ごとに以下のとおりです。団体による助成を受ける場合には、本公益信託の規定に基づき、指定団体として指定を受ける必要があります。詳しくは、受託者にお問い合わせください。

- | | |
|---------------|------------------------|
| (1) 派遣事業 | 個人の場合は40万円、団体の場合は100万円 |
| (2) 受入れ事業 | 個人の場合は10万円、団体の場合は50万円 |
| (3) コンベンション事業 | 100万円 |
| (4) 国際化資料作成事業 | 30万円 |

4. 応募方法

申請書用紙は、三井住友信託銀行のホームページからダウンロードしてご応募ください。なお、開発トラストに関するQ & A及び過去の実績一覧を併せて掲載しておりますので、申請の参考にしてください。

【URL:<https://www.smtb.jp/personal/entrustment/public/example/list#Cooperation-Exchange>】

所定の申請用紙（団体の場合：様式2-1、個人の場合：様式2-2）に必要な事項を記載し、事業ごとに指定された書類を添付してお申し込みください。また、提出された応募用紙は返却致しませんので、ご承知おきください。

※応募の際は、公益信託北海道開発国際交流基金助成金給付申請要領等を確認願います（以下URL）。

https://www.smtb.jp/-/media/tb/personal/entrustment/public/example/pdf/HokkaidoKaihatsu_a.pdf

5. 募集期間

2025年11月1日（土）から2026年1月31日（土）まで（当日消印有効）

※助成対象事業の実施期間は2027年3月末までといたします。

6. 選考及び通知

募集締切り後に開催する当基金運営委員会において選考決定の上、2026年3月下旬頃にその結果を文書にてお知らせします。ただし、審査の経緯等のお問い合わせには応じかねますので悪しからずご了承ください。

7. 実施報告及び助成金の給付

事業が完了後、事業完了報告を提出していただきます。この報告を受け、助成金を給付します。なお、事業完了報告書の内容は一般に公開する場合がありますのでご了承ください。

また、偽りその他不正な手続きにより助成金の交付を受けたり、目的以外に費消したときは、授与した助成金は返還していただきます。

【申請書の提出先・照会先】

〒105-8574 東京都港区芝3-33-1

三井住友信託銀行 個人資産受託業務部 公益信託チーム

北海道開発国際交流基金 申請口

TEL 03-5232-8910（受付：平日9時～17時）

申請書URL <https://www.smtb.jp/personal/entrustment/public/example/list>

公益信託北海道開発国際交流基金 2024年度採択事業 実施概要のご紹介

1. (コンベンション事業) 第9回全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議 (2024札幌)

申請者：第9回全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議 札幌実行委員会

地球規模の気候変動が水やエネルギーの循環に及ぼす影響について、最新研究や社会での応用事例を発信しながら、国民全体の気候変動や防災への意識醸成に繋^{つな}げることを目的に開催された国際会議です。同国際会議の日本初開催でもあり、5日間の開催期間に、世界45の国と地域から、研究者や協賛機関、ステークホルダー等を含めて合計1,300名が参加しました。研究者によるセッションに加え、市民向け講演会等の関連プログラムも開催され、学術的な成果が、気候変動分野における政策や地方公共団体、市民レベルでの活動を推進している状況を示すことができました。



2. (派遣事業) 世界を知るスタディツアーによる高校生派遣事業

申請者：一般社団法人 滝川国際交流協会

ESD (Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育) の視点から、異文化を理解し国際的視野を広め、国際人としての人間形成を目標として、2025年1月19日(日)～24日(金)に、滝川市内の高校に在籍する5名がシンガポールに派遣されました。シンガポール国立大学での学生との交流ほか各地を訪問し、多文化共生社会の実現やSDGs、短期間で急速な経済成長の様子等を学びました。帰国後に市内で報告会を実施するなど、国際的な視点で思考する力を養う取り組みも実施しています。参加した高校生からは、英語で現地の大学生と交流したことの達成感や、異文化に触れて得た学び、さらなる国際交流への意欲が高まったことなどが報告されました。ツアー全体の満足度も非常に高く、今後も後輩のため、是非開催して欲しいとの意見が寄せられています。



3. (コンベンション事業) 2024UCCNデザイン都市旭川会議

申請者：2024UCCNデザイン都市旭川会議 開催実行委員会

旭川市は2019年にUCCN（ユネスコ創造都市ネットワーク）に加盟認定を受け、デザインの力を活かした持続可能な都市作りを目指しています。5日間の会議期間中に、UCCN加盟の21か国23都市から48名が旭川市を訪れました。会議中、「デザイン都市旭川宣言」が採択され、デザインの力で自然と社会の調和を図り、持続可能で幸せな未来を創るために連携して取り組んでいくことが合意されました。本会議の実施により、世界のデザイン都市担当者と直接対話・交流できただけでなく、エクスカッションや地域住民との交流を通じて旭川地域の魅力と価値を世界に広く伝える機会が創出され、世界市場での販路拡大が期待できるとともに、国際的な発信力を強化することができました。



4. (派遣事業) 米国シーニックバイウェイとシーニックバイウェイ北海道の連携協定締結に向けた調査団の派遣事業

申請者：一般社団法人 シーニックバイウェイ支援センター

シーニックバイウェイの先進地域である米国のプログラムや地域活動についての現地調査と、米国の「コロラドシーニック&ヒストリックバイウェイ」と「シーニックバイウェイ北海道」の姉妹ルート協定締結に向けた調整を行い、その結果を日本国内の「シーニックバイウェイ」や「日本風景街道」に還元することを目的として調査団を派遣しました。調整の成果もあり、現地訪問後の2025年6月に、当該姉妹ルート協定締結への調印式が行われ、姉妹バイウェイとして活動を進めていくことが決定しました。また、現地調査で得た情報を整理した冊子を作成し、関係団体へ配布する予定もあります。これにより、米国シーニックバイウェイの現状について、関係団体へ貴重な情報を提供できることが期待されます。



第39回



寒地土木研究所講演会

～土木が創る魅力ある地域、心豊かな暮らしへ～

2025
11.6
THU

開演 13:20 (受付開始 12:30)
パネル展 12:30 ~ 17:30
定員 450名
会場 かでる2・7
アスビックホール
札幌市中央区北2条西7丁目

会場アクセス



プログラム

program

特別講演

13:30 ~ 14:30

「土木 × 教育で創る北海道の未来」

～北海道開拓の初めに学校があった～
一般社団法人北海道開発技術センター地域政策研究所参事
認定 NPO 法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長
新保 元康 氏

一般講演

14:55 ~ 17:00

「社会構造の変化に対応した資源・資材活用・
環境負荷低減技術の開発」
土木研究所 先端材料資源研究センター (iMaRRC)
材料資源研究グループ長 新田 弘之

「積雪寒冷地の橋梁床版、道路舗装の
効率的な維持管理技術について」
寒地保全技術研究グループ長 島多 昭典

「地域社会を支える冬期道路交通サービスの
提供に関する研究開発」
寒地道路研究グループ長 松澤 勝

「気候変動下における水資源・水環境の
変化予測技術の開発」
水環境保全チーム 上席研究員 横山 洋

「水産王国・北海道の未来を担う漁場生産力の強化」
水産土木チーム 上席研究員 西崎 孝之

お申し込みは

<https://chouseikan.ceri.go.jp/web/event/>

寒地土研 イベント情報

で検索

スマホ・タブレットはこちらから

参加費無料!



本講演は、下記プログラムに認定されています。



(公社)土木学会継続教育 (CPD) プログラム
・認定番号: JSCE25-0995
・認定単位: 3.2単位



(一社)全国土木施工管理技士会連合会継続
学習制度 (CPDS) プログラム
CPDS プログラム登録番号 1010123
形態コード 101-1 分野 3unit
101-2 分野 1unit
(101-2 分野は年間上限 6unit)

4unit

参加者のみなさまへお願い

申し込み時のQRコード画像をスマートフォンに保存もしくは印刷してご持参願います。

ご来場のみなさまには下記項目にご協力をお願い申し上げます。

- ・国や自治体の方針等により、急遽開催の中止や延期となる場合があります。
- ・事前申込をされずに来場された方は、受付にて申込み用紙に必要事項を記載の上参加してください。

お問い合わせ

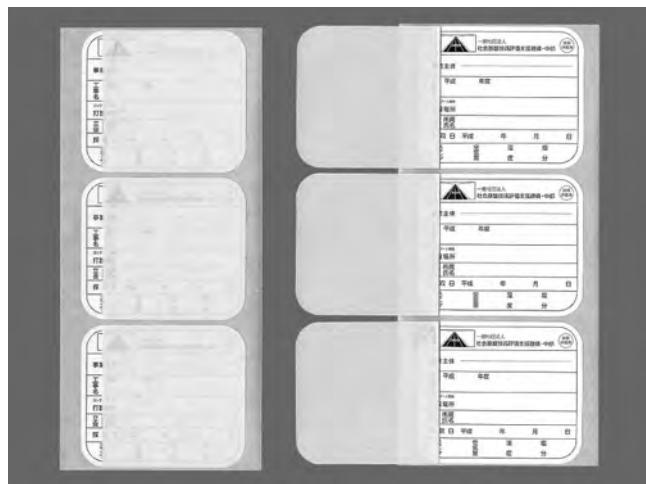
国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所 寒地技術推進室

TEL: 011-590-4046 平日/9:00 ~ 16:00 E-mail: lecture2025@ceri.go.jp

(一財)北海道開発協会 (委託販売商品)

「コンクリート供試体確認版」のご案内

品質証明シール (1 シート 3 枚綴り) 396円



使用手順マニュアル



① 透明フィルムを左端の接着部分を剥がさないように、右端からめくり上げる。



⑥ シールの中程までコンクリートの打設が終わったら指をはずし、最後まで打設を完了する。



② 筆記具を用いて必要事項を記入する。



⑤ 記入面が型枠内側に接するようにして、上縁部から1~3cmの位置にシール上辺を合わせ、指で固定し、コンクリートを打設する。



③ 透明フィルム裏の青色剥離紙を剥がし、記入面にシワにならないように接着する。



④ ①~③が完了したシールを水色台紙から剥がす。

発送をご希望の場合

- ・当協会のホームページ (<https://www.hkk.or.jp>) より注文フォーマットを印刷し、会社名、商品名等を記入のうえ、FAX (011-709-5225) で送信願います。
送料は道内一律770円 (税込)。離島及び道外は着払いとさせていただきます。
- ・代金は、銀行振込又は現金書留でご送金願います。

銀行振込の場合

下記の口座に合計金額 (商品代金 + 送料) をお振り込み願います。

北洋銀行北7条支店 普通口座 3195695 一般財団法人北海道開発協会

北海道銀行札幌駅北口支店 普通口座 0303761 一般財団法人北海道開発協会

※商品は、入金確認次第発送いたします。

発送を急がれる方は、銀行の「振込証明書」と注文書をFAX (011-709-5225) で送信願います。

現金書留の場合

下記の宛先に注文書を同封のうえ、合計金額 (商品代金 + 送料) を郵送願います。

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル1階

一般財団法人北海道開発協会

販売元 : 一般社団法人中部地域づくり協会

TEL 052-962-9086

委託販売 : 一般財団法人北海道開発協会

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

TEL 011-709-5212 FAX 011-709-5225

お知らせ

✎ 研究所だより ✎

少し前の連休中に、新潟県の長岡市に行ってきました。街を歩けば、雁木（歩道にある屋根状の構造物）が続きます。

商店街にある雁木とアーケード（片側式）は見た目には区別が付きにくいのですが、アーケードはもともと店頭の生鮮食品を強い日射から守る目的もあったようで、だから、西日本にアーケード商店街が多い印象があります。一方、雁木は、豪雪地帯にあって、積雪時の人々の通行を確保するためのものです。除雪の手間も省けます。以前訪れた上越市高田では、高田駅から一つ隣の駅まで途切れなく続いていました。

冬期の通行の利便ということでは、札幌では苗穂駅や琴似駅を始めとして屋根や壁のある密閉型の空中歩廊が増えています。長岡駅でも、交差点の上を越えて反対側にある市役所や屋根付き市民広場に至る通路が、同様のつくりになっています。

吉田兼好は「家のつくりようは夏をむねとすべし」と書いたそうですが、寒冷地にあつては、冬を快適に過ごせる家が求められること、言うまでもありません。同様に、人々が街中に出るときには、いかに冬の行動を確保するかが大切です。そのことは、雁木が始まった江戸時代も現在も変わりません。

（目黒）

11月6日（木）

第39回寒地土木研究所講演会

※詳細は42ページをご覧ください。

12月2日（火）

令和7年度 地域活性化活動発表会

※詳細は37ページをご覧ください。

国営滝野すずらん丘陵公園

滝野すずらん丘陵公園は、11月10日（月）をもってグリーンシーズンの営業を終了します。残り少ない滝野の秋をお楽しみください。

～11月10日（月）

巨大ホオノキの葉っぱを探せ！

縦と横の長さの合計が60cmを超える巨大なホオノキの葉っぱを探そう！見つけたら、滝野の森オリジナルグッズをプレゼント！

- 参加費 無料（入園料・駐車料金は別途）
- 場 所 森の交流館（滝野の森ゾーン・東エリア）
- 時 間 9:00～17:00
- 定 員 なし

ノルディックウォーキング100kmコンペ

目標距離を決めて、ノルディックウォーキングをされたい方におすすめ！その日歩いた距離を申告いただくとスタンプ用紙に記録しお渡しします。100kmを超えた方は達成賞をプレゼント、また達成を記念して園内の施設にお名前を掲示します。

- 参加費 無料（入園料・駐車料金は別途）
- 場 所 受付場所：東口ゲート・森の交流館・案内所
- 時 間 9:00～17:00
- 定 員 なし

※詳細は当公園ホームページ（URL：<http://www.takinopark.com/>）をご覧ください。か、滝野公園案内所（011-592-3333）までお問い合わせください。



●「開発こうほう」へご意見・ご感想をお寄せください。

（一財）北海道開発協会広報研修出版部

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

電話 011 (709) 5212

e-mail:pr@hkk.or.jp

●「開発こうほう」は、北海道開発協会のホームページでもご覧になれます。

●（一財）北海道開発協会では、賛助会員を募集しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。

開発こうほう 第747号 令和7年11月1日発行

発行 （一財）北海道開発協会

印刷 （株）須田製版 不許複製

<https://www.hkk.or.jp/>



業 務 内 容

- 土木工事全般
- 道路維持管理業務
- TVカメラ調査・管更生
- 除排雪業務
- 排水構造物清掃
- 産廃物収集運搬及び中間処理

 HRM HOLDINGS GROUP

HRM 北海道ロードメンテナンス株式会社

HOKKAIDO ROAD MAINTENANCE

本 社	〒060-0031 札幌市中央区北 1 条東12丁目22番地48	TEL (011) 241-1692	FAX (011) 241-7774
真駒内事業所	〒005-0861 札幌市南区真駒内52番地	TEL (011) 592-6512	FAX (011) 594-2258
発 寒 事 業 所	〒063-0835 札幌市西区発寒15条12丁目 1-25	TEL (011) 665-3259	FAX (011) 665-8447
北 見 事 業 所	〒099-0878 北見市東相内町110番17	TEL (0157) 36-9811	FAX (0157) 36-9812



h-rm.co.jp/



この街の、
あなたのココロと、
ひとつになりたい。
コカ・コーラ。

わたしたちは、地域社会の発展に
貢献する企業でありたいと願っています。
飲料製品の製造・販売以外にも、
地域のイベントやプロジェクトの支援、
子どものための教育プログラムの提供など
さまざまな活動で地域のみなさと歩み続けます。
これからもずっと、みなさまとともに！



